
いざなぎ

日比谷碌樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いざ風ぎ

【Nコード】
N5799J

【作者名】
日比谷碌樹

【あらすじ】
新進気鋭の考古学者、諸橋守門は、ある日たまたま訪れた新宿のキャバレーで、十一年前に別れたきりだった幼なじみの高部阿夜と再会する。彼女の友人の挙動が最近おかしいとの相談を受け、真相究明に乗り出す守門。そこには意外な事実が隠されていた――魔物、異界、魑魅魍魎が跋扈する現代御伽草子。考古学者・諸橋守門シリーズ第一弾。

序章（前書き）

あらずじほど派手な内容ではありません（むしろ地味です）。

この第一弾はラブ度がほぼゼロですが、あとに行くほど高くなります。

擬似兄妹という呪縛から抜け出せない守門と阿夜のもどかしい関係がメインですかね。

そこまでお付き合いいただければとてもうれしいですが。。

序章

必要なのは四人。四人でいい。曾我修造そがしゅうぞうは裏庭に集まった三人の身内を見回した。舅、姑、それに妻の蓉子ようし。己を入れて頭数はちょうど四人だ。これで儀式が始められる。

石はあまり大きなものではなかったが、それは問題ではない。少なくとも舅はそう断言していた。曾我家に伝わる口伝に因れば、大事なのは形状、人数、それに血筋だと。修造は家長らしく重々しく肯き、言った。

「始めよう」

最初は舅だ。来年八十に手が届こうという彼の足取りは驚くほど正確だった。次は姑。この暗闇では彼女がもつとも危ぶまれた。多少時間はかかったものの、どうやら無事に終わったらしい。妻が動き出す気配を感じた。間もなくして彼女の手が自分の肩に置かれる感触があった。修造は大きく息を吐き出した。

——やつと会える。あの子に、もう一度。

逸る気持ちを抑えつつ、彼はしっかりと草を踏みしめてそこへ進んだ。あと二歩。あと一歩。……手を伸ばした。

手はなにかに触れた。修造の顔が歡喜に歪んだ。思わず叫んでいた。

「未良……未良、お前だな。帰っちきちくれたんだな、未良」

修造は両腕を広げ、漆黒の空間に生み出されたそれを抱こうとした。しかし、彼の願いは叶わなかった。四人は呆然として立ち尽くした。

闇よりも黒いそのなにかは、決して人の姿をしてはいなかったからだ。

第一章 カバレ・ガルシア、或いは安寿姫

地表にこもった熱気が夜になっても中々消えようとしない真夏のある日、JR新宿駅の東口に夜九時に来るよう、諸橋守門もろはしずもんは研究室の責任者であり、師でもある山際教授やまぎわに言い渡されていた。机に山積みになされた考古資料の文献整理を無理やり切り上げ、中央線を降りたのは九時五分前。ぎりぎりではあるが、なんとか間に合った。急ぎ足で改札を抜け、待ち合わせ場所へ向かおうとした矢先、誰かにぶつかった。

「きゃっ」

細い声がり、バランスを崩して倒れ込む若い女性の姿が目に入った。守門は慌てて彼女を助け起こした。

「大丈夫ですか？ すみません、急いでいたもので」

「あ、いえ、こちらこそ…… すいません。大丈夫です」

彼女は顔を上げた。その拍子に、茶色がかった髪がやわらかく艶めいて揺れた。人形のように小さな顔は愛くるしいという表現がぴたりで、なにより長い睫毛に縁取られたアーモンド型の瞳がひどく印象的な娘だ。守門が普段接している女子大生たちと年齢はいくらも変わらないだろう。

「……あの……？ どうかしました？」

女性は戸惑ったように守門を見ている。我に返り、守門は彼女の腕を支えていた手を離れた。彼女は素早く頭を下げると、よほど急いでいるのかそのまま雑踏へと駆け出していた。その後ろ姿を見送るともなく見つめていた守門の肩を、背後から誰かが叩いた。

「二分遅刻だぞ、諸橋君。君らしくないな」

振り向くと、研究室の長・山際暢のほろが立っていた。咎めるような口調とは裏腹に、顔には意味ありげな表情が微妙に浮かんでいる。五十代後半という年代にはめずらしい百七十五センチという身の丈に

加え、白髪は混じるものの頭髪もまだまだ豊かな、見た目はいわゆるロマンスグレーの紳士である。しかし並外れて旺盛な好奇心及び悪戯心の持ち主でもあるため、学生時代から彼に学んできた守門はたびたびその悪意のない攻撃的になっていた。

「知り合いかね？　いまの彼女は」

「ご覧になっていたんですか、教授。相変わらずお人の悪い……」

「いや、はつきりと見ていたわけじゃないさ。それにしてもずいぶん名残惜しそうに見えたが、そんなに可愛い子だったのかね？　残念ながら私にはそこまでちゃんと見えなかったんだが」

そう言つてにやつく師匠に、守門は大げさにため息をついてみせた。

「それより教授。今日は一体なんなんですか？　この時刻に新宿駅東口なんて、歌舞伎町に繰り出そうとでもおっしゃるんですか」

ディフェンスとしての軽口のつもりだったが、山際の反応は意外なものだった。

「察しがいいな、君。そのとおりだよ」

言うなり彼を導くようにさっさと歩き出す。驚いてあとを追う守門。

「ちょ——教授、申し訳ありませんがぼくはその手の店にはちょっと……」

「裏通りに素晴らしく好い店があるんだよ。カフェ・コンセル、カバレット、かつては欧州にそんな名で存在した失われし美しき酒場というやつさ。スタッフがまた一流だね。特にあそのこのマダムは、なんと言ったらいいか、いや傑作だ」

山際は守門を完全に無視してしゃべり続ける。

「フランス文学や現代南米文学にのめり込んだって話でね。若い頃はさぞかしの文学少女だったんだろうな」

なにがおかしいのか、思い出し笑いを押し殺している師匠の様子に、守門はたまりかねて口を挟んだ。

「教授、そういう場所はぼくでは役不足ですよ。小宮山君か寺脇君

でも同行させた方が……」

五分ほど歩いたところで山際はわき道に入った。小さな目立たない、しかし妖しい雰囲気の漂う店がいくつも軒を連ねている。山際は講義でもするかのように人差し指を振ってみせた。

「寺脇はまだだめだ、あれは今年やつと二十三だろう。子どもが楽しめる場所じゃない。それに小宮山君もな……おそらく彼女はマダム・ガブリエルのお気に召さない気がしてな」

「マダム・ガブリエル？」

「その店のオーナーだよ。ほれ、あの……ノーベル文学賞を獲った南米の作家、なんとかの孤独つてやつを書いた」

「ああ——ガルシア・マルケスですね。彼のファーストネームから採った名ですか」

「そうそう、ああ、ここだよ。その『カバレ・ガルシア』は」

山際は一軒の店の入り口で足を止めた。木造の扉の横にはアールヌーボー調のランタンが下がっている。羽を広げた蝙蝠のシルエツトを思わせる真鍮のハンドル^{カン}を彼は躊躇なく引き、中へと入った。

「あら！ お久しぶりねえ、先生」

すぐに噂のオーナーらしき見事な体格の女性が——女性と信じるならば、だが——二人へと駆け寄ってきた。どう見ても欧風がコンセプトの店内だというのに彼女の衣装はなぜか和装で、大胆に肩が開き、スリットさながらに合わせ目をずらして太ももを見せる斬新なデザインは夜鷹を連想させた。彼女は守門に視線を向けるとしばし見惚れたように黙り込んだ。

「……いやだ、なにこのイケメン！ お初じゃない？ 先生のお弟子さん？」

「ああ、ほらこの前言ってただろう？ 次は活きのいいのを連れてくるって」

山際はマダム・ガブリエルに悪戯っぽくウインクをした。守門は内心の居心地の悪さを隠しつつ、紳士的な微笑を絶やさずに名前を告げた。「どうも、諸橋と申します。山際教授には学生時代からな

にかとお世話になっておりまして」

若干の皮肉を交えた自己紹介だったが、山際はどこ吹く風である。
「マダムの好みにぴったりだろ？ なにしる彼、女子学生からの人気は学内でもナンバーワンだからね」

マダムは惚れ惚れと守門を見つめ、肯いた。

「でしようねえ。アタシもいろんな筋のお客様見てるけど、ここまでのレベルは中々いないわよ。お歳はいくつになるのかしら」

「今年二十九です」

「まああ、二十代！ やだわアタシ、本気で恋しちゃうかも」

山際は嘖き出した。そして彼の愛弟子をしみじみと眺めた——艶のある肩までの髪、彫り深く整った知性的な顔、甘く低い声。それに一八〇センチを越える引き締まった体躯。山際のかつての教え子である諸橋守門という青年は、そこいらの俳優にもまるでひけを取らないハイクオリティな外見的美点をいくつも備えている。マダムの賛辞はあながち商売人のリップサービスというわけでもないのだった。

マダムは二人をボックス席へと案内した。もともと、ここ「カバレ・ガルシア」の各テーブルは、それぞれがちよつとした間仕切りによって独立しており、そういう意味ではすべてがボックス席、そして個室のようなものだった。

シートにはくすみがかった青いびろうどが張られていて、よく見るとすべてのテーブルで色は違えてあった。それもこの風変わりなマダムのこだわりのひとつなのだろう。

「山際先生はまず、ブラウンビールよね。それにあなたは……ううん言わないで、お好みのお酒当ててみせるから」

彼女は燕尾服姿の男性スタッフに耳打ちし、よく冷えたグラスと海外メーカーの瓶ビールを二種類用意させた。

「じゃあまず、乾杯しましょうか」

守門のグラスに注がれたのは黒褐色のスコッチエールだ。名称どおりスコットランドが発祥地の、比較的アルコール度数が高めなビ

ールである。三人は山際の音頭でグラスを軽く触れ合わせた。前世紀初頭の文学酒場をイメージして作られた雰囲気ある室内には古びたベーゼンドルファーのアップライトピアノが置かれ、サティの音楽を自動演奏で気だるげに奏で続ける。退廃的とも言える空気に守門は早くも軽い酩酊を覚えた。

そうした小道具のひとつなのか、店内には黒猫がいた。頸^{くび}に紫色のリボンを巻かれたその猫は、猫なりに立場をわきまえているのかマダム・ガブリエルの腕の中に収まるとおとなしく喉を鳴らしている。マダムはとろけそうな声を出した。「よしよし、サリちゃん。新しいお客様よ、どう、男前でしょ」

猫は心得たように一声鳴いた。守門は言った。

「サリ……なるほど、黒猫^{シャ・ノワール}にはふさわしい名前ですね」

「あらあさすが、よくご存知ね。残念ながらこの子は女の子だけだよね」

かつてパリに存在し、一時代の文化を作り上げたと言っても過言ではない伝説の文学酒場「シャ・ノワール」。そのプロデューサー、ロドルフ・サリが命名の由来であることはすぐに察しがついた。守門の言葉にマダムは気を良くしたのか、声を潜めて悪戯っぽく囁いた。

「諸橋さんておっしゃったかしら、お客様、気に入っちゃったわ。

……いいわ、こうなったら、うちのとおきのお姫様を紹介してあげなきゃいけないわね」

「え？ いえ、私はそんなつもりでは」

守門は慌てた。その機先を制して山際が囁く。

「そう来なくっちゃな。マダム、この諸橋君は、これだけの恵まれた外見^{もの}を持っているくせに、んとその方面には弱いんだよ。私もそこそこだけは常々心配していたね。この店で開眼してくれれば、師匠としてこんなに嬉しいことはない」

「教授、話をおかしな方向に広げないでください。ぼくはですね、別にそんな——」

マダムは守門の抵抗にはかまうことなく、控え室へと声を張り上げた。

「安寿ちゃあん！ お客様が呼びよ。青シェージュ・ブルーの席までお願い」

まもなく現れた娘を見て、守門は言葉を失った。ウェーブのかかった豊かな髪を背中まで垂らし、絹のような白い肌に同じく白いびろろのドレスをまとった彼女は、さながら等身大のアンティークドールそのものだった。山際さえも息を呑み、その可憐さに目を奪われている。しかしさすがは年の功で、初めに口を開いたのもやはり彼だった。

「……いやあマダム。こりや想像以上だ。諸橋君にはもったいないくらいだ」

マダムは彼らの反応を満足げに眺め、娘の細腰を引き寄せた。

「でしょう？ さ、いらつしゃい。皆さん、紹介するわね。わが『カバレ・ガルシア』の美しき蝶々、安寿姫あんじゅひめよ」

「こんばんは、はじめまして。安寿と言います」

娘は貴族の令嬢のごとく、ドレスの裾を軽く持ち上げて優美に会釈をした。それから顔を上げ、にっこりと微笑した。

「安寿ちゃんは諸橋さんのお隣ね、さ、座って座って」

彼女——安寿はわずかに含羞みながら守門の横に腰掛けた。あらためてその横顔を見た守門は思わず声を上げた。

「あれ？ 君……さつき、新宿駅で……」

「えっ？ ……あ、あなた、さつきの」

安寿はその大きな瞳をさらに見開き、まじまじと守門を見つめた。そして照れたように屈託なく笑う。

「やだ、じゃあ普段メイク見られちゃってるんだ？ いま、ほぼ舞台メイクだから一瞬わかななかったんですね。恥ずかしい」

その笑顔は妙に守門の心を和ませた。山際はその様子を興味深げに見守った。彼が知る限り、守門が女性相手にこんな表情を見せることなど、これまでにはなかったことだ。安寿が注いでくれたスコッチエールを一口含み、守門はさらに言った。

「不思議だな。なんだかずっと前から知ってるような気がする。さつき初めて会ったはずなのに」

「ほんとに？ …… 実はあたしもなんです。既視感ってやつなのかな」

安寿は驚きに頬を紅潮させた。守門はあごに手を当て、彼女を凝視した。

「いや…… そんなんじゃない、もっと現実的な感じた。君のその、声とか…… 表情とか」

そんな二人の姿を見て、マダム・ガブリエルが意味深な笑みを浮かべて山際に耳打ちする。

「ねえ先生、いい感じじゃない？ 二人」

「ああ、私も驚きだよ。諸橋君の好みはこういう可愛いタイプだったんだな、それこそ人形みたいだな。そりゃあ小宮山君は受け付けないはずだ。なにしろまったくかぶらないからなあ」

山際はビアグラスを傾けながらにやにやと笑っている。守門は咳払いをしてから言い返した。

「教授、そういうことを軽々しくおっしゃるのはやめてくださいと前にも言ったじゃないですか。教授があちこちでそんな風に吹聴するおかげで、ぼくのゼミの学生の間にも根も葉もない噂が広まってしまうているんですからね」

「根も葉もないかどうかは、神のみぞ知る…… ってな」

興の乗った山際の軽口は止められない。守門は大きくため息を吐き出した。話題を変えようとしてか、不意に安寿が彼に声をかけた。

「あの…… 大学の先生なんですか？ お二人とも」

山際のグラスにそつなく二杯目のレーベンブロイを注ぎながら、マダム・ガブリエルが代わりに答えた。

「そうなのよ、安寿ちゃん。こう見えて偉いのよ、東大（あづま）の文学部の教授なんだから。それにそちらの諸橋さんは、確か山際先生の教え子で、いまは……」

「ああ、史学科で古代史を教える。准教授だが、あと十年ちよっ

ともすりや教授昇進は間違いないね。そっち方面意外は実に有能な男だからな」

そう言つて山際は片目を瞑つてみせた。守門は仕方なく苦笑した。「ほらいまテレビなんかでも話題になつてゐるだろ、奈良の箸墓古墳。あれに関する新説の切り口なんかはいまだに語り草だよ」

マダムは眉根を寄せた。仏文には強いが日本史には弱いのである。「ハシハ力？ それつてなに……お箸のお墓？」

呆れたような顔の山際に代わつて答えたのは、意外にも安寿だつた。

「奈良の桜井市つてところにある古墳ですよ。ほら、前方後円墳とか、歴史で習いましたよね。あれのもつとも古い時代のもので、一説には卑弥呼の墓だつて言われてるんだそうです」

マダムは驚いて安寿を眺めた。

「やだ安寿ちゃん、ずいぶん詳しいんじゃない。知らなかったわアタシ、あなたが歴史得意なんて」

「いえ、別に、得意つてほどじゃ。ただ、昔、お隣にすごく歴史に詳しいお兄さんが住んでて、よく遊んでもらつたんですよ。その時にいろいろ教えてくれて」

安寿のなにげない言葉に守門は硬直し、弾かれたように彼女を見た。

「へえ、じゃあ安寿ちゃんの幼なじみつてわけ？ いまも仲良いの？ その人」

マダムがのんびりとした口調で訊ねる。安寿は首を横に振つた。

「それが、あたしが十歳の時に引越しちゃったんですよ。だからそれつきり」

守門は安寿の左手を思わずつかんでいた。いきなりのことに安寿は固まつて自分を見ている。守門はかまわず、乾いた声を喉元からようやく絞り出した。

「君——阿夜か？」

「えっ？」

安寿は訝しげに訊き返した。守門は急き込むように重ねて言った。
「昔、十年くらい前、うちの隣に住んでいた、高部阿夜……じゃな
いのか？」

一瞬の沈黙の後、彼女は素っ頓狂な声で叫んだ。

「——お兄ちゃん？ うそ……守門お兄ちゃんなの！？」

傍ではマダム・ガブリエルと山際が、思いもかけない成り行きに
呆気にとられた様子で二人を見守っている。

これが、「カバレ・ガルシア」の蝶・安寿姫こと高部阿夜と、新
進気鋭の考古学者・諸橋守門との、十一年越しの邂逅の夜となっ
たのだった。

第一章 カバレ・ガルシア、或いは安寿姫（後書き）

「准教授」は「助教授」とは違い、いわゆる教授の下に位置するわけではないそうですが（≠助監と監督の関係）……語感が好きで、なんとなくこつちを採用しました。そもそもこの若さでゼミ持つてるとか、ま、その辺は（笑

第二章 恵良 その1

重厚なレンガ造りの門扉には「東亜大学 三鷹キャンパス」の文字が掲げられていた。阿夜は、昨夜もらったばかりの手元の名刺を確かめた。間違いない。

午後一時過ぎの構内は思ったより閑散としていた。彼女と同年代の学生たちが、楽しげにお喋りを交わしながらぱらぱらとすれ違う。門扉からほど近くに設えられた学内案内板を見つけ、目的地の場所を覚えこむと、阿夜は早速そこへ向かった。やがて四階建ての赤壁の建物――教授棟が見えた。守門が言っていたとおりだ。

「えーと……この二階だったよね、確か」

独りごちながら自動ドアを抜け、階段を昇っていく。やがて廊下のいちばん奥の部屋に彼女はたどり着き、軽くノックをした。

「はい」

落ち着いた女性の声が返ってきた。ドアを開けたのは若い女性だった。高級そうな生地のスーツにフェラガモのポンプス。髪は栗色のショートボブ。美人だが、同時に少々冷たそうな雰囲気を漂わせた、阿夜の友人にはいないタイプだ。

「あら……なにか、講義のことかしら。質問でも？」

阿夜を学生だと思ったのか、彼女は怪訝そうな顔つきでそう訊ねた。

「いえ、そうじゃないんですけど……あの、諸橋准教授は」

「諸橋先生なら、いま奥で作業中よ。急ぎの用でないなら、悪いけど出直してもらった方が……」

なんとなく迷惑そうな声色だった。阿夜がもう一度口を開こうとした時、女性の背後から守門が現れるのが見え、彼女は思わず声を上げた。

「あ、お兄ちゃん！」

「えっ？」

女性と守門が同時に阿夜を見た。守門はなにかしら慌てたような素振りで大股に走り寄ってきた。

「ああ、阿夜か。ちゃんと来れたんだな、途中で迷わなかったか」

「もう、子ども扱いしないでったら。道聞いてあったんだから迷うわけないじゃん」

脹れる阿夜の頭を彼はよしよしと撫でた。そして、目を丸くして見ている先ほどの女性に短く告げた。

「少し外すよ。小宮山君、悪いがあとはしばらく頼む」

「え——あ、は、はいっ」

まじまじと阿夜を凝視する彼女を残し、守門は阿夜の肩を軽く抱いて歩き出した。

「じゃあ阿夜、カフェテリアがあるからとりあえずそこで」

「わあい、奢りね、お兄ちゃんの」

守門は苦笑した。「調子のいい奴だな」

じゃれ合いながら廊下を歩いていく二人を、小宮山と呼ばれた研究室の女性は姿が見えなくなるまでずっと見送っていた。阿夜は事情を察して一人にやついた。

ははあ——あの人、お兄ちゃんが好きなんだ。中々モテるんじゃない、お兄ちゃん。

東亜大の構内には生協と食堂が入った通称「学生棟」があり、その二階のカフェテリアを守門はよく利用している。大学自体は古い、この棟は数年前に改築されたばかりで、そのモダンで上品な内装は学生のみならず教授連にも好評だった。店内は半端な時間にも関わらず意外に賑わっていた。むろんセルフスタイルなので、二人はまず席を取り、それから守門が阿夜にカプチーノを、そして自分

にはコーヒーを運んできた。

「ありがと、お兄ちゃん」

そう言って一口すすり込むも、彼女は周囲の穏やかならざる視線を感じて落ち着かなかった。点々と置かれたテーブルを囲む、主に女子学生たちが、先ほどから一様に鋭い眼差しを送ってくるのである。ひそひそと囁く声、なかば堂々と聞こえよがしに話す声。それらが守門のために発生していることは想像に難くない。阿夜はすっかり感服してこっそりつぶやいた。

「中々どころじゃないや。お兄ちゃん、すごい」

「え？ なにか言ったか、阿夜」

守門は怪訝そうに阿夜を見た。阿夜は慌てて首を振り、笑顔を見せた。

「うつん、なんでもない。……でも昨日はほんとびっくりしちゃった。確かに、なんか見覚えあるなあって不思議だったんだけど」

「それは私も同じさ。そもそも、新宿駅でぶつかった時に、そんな感じがしてたんだ。まさかあの店で再会するとは思わなかったが」

守門は感慨深げにつばやき、駅で最初に阿夜と接触した時のことを思い出していた。普段見慣れている女子学生たちとは、彼女はまるで違って見えた。山際教授の弁ではないが、元々自分は女性が苦手である。それなのに、助け起こした娘——阿夜が体勢を整えて立ち去ろうとするのを見て、なぜだかひどく別れ難い気さえ覚えた。

阿夜がかつての幼なじみの少女であることを意識化で判別していたのかも知れない、と後に彼は自己分析していた。

「それに名前が違ってたからわかんなかったんだ、あたし。お兄ちゃん、確か昔は……」

守門はコーヒーカップに口をつけ、一口すすってから答えた。

「離婚してね。姓を変えるかどうか迷ったが、母が不憫な気がして」

「そうなんだ。……ごめんなさい」

阿夜は口元を押さえた。守門は微笑し、首を軽く振った。

「いや。当時すでに親の不仲で悩むような年齢でもなかったからな」

守門の一家が世田谷から引つ越したのは十一年前のことだが、その直後、彼の両親は離婚し、二人の息子のうちまだ未成年だった弟の守門の親権は母のものになった。守門はいったん母方の実家がある鎌倉へ移ったが、すぐに大学進学のため都内で一人暮らしを始め、いまに至っている。

「君は？ 実家はまだ世田谷に？」

阿夜は首を横に振った。

「あたしが高校二年の時に父が死んじやって、家とか手放して母の郷里に引つ越したの。そのあとあたし高校辞めて東京に来たん^{いなか}だ」

守門は驚いたように阿夜を見、神妙な顔つきでつぶやいた。

「そうか……すまない、全然知らなくて——」

「やだ、そんなの知らなくて当たり前じゃん。そうだ、それよりもね、本題なんだけど」

阿夜は若干声を落とし、カプチーノを一口含んでから続けた。

「昨日はいなかったけど、『ガルシア』のキャバ友で、恵良って子がいるの。あたしより二コ下だから今年十九かな。その子、実家が福岡でね、この前まで帰ってて、一週間くらい前に東京に戻ってきたんだけど——」

その2

福岡空港から実家のある太宰府市までは電車で一時間弱の道程だ。
曾我^{そがえら}恵良は地下鉄と特急を乗り継ぎ、小糸^{こいと}町の自宅にたどり着くと
門扉を抜け、玄関のチャイムを鳴らした。しかし応答はなかった。
訝しく思いながらも鍵を取り出し、ドアを開ける。熱っぽく籠った
空気を感じ、思わず顔をしかめた。

「ただいまあ。……誰もいないの？　なによ、そっちで帰って来い
って言ったくせに」

恵良は不興げに眉を顰めた。彼女は半年前、高校を卒業すると同
時に親の反対を押し切って上京していた。東京にある服飾関係の専
門学校に通うためだ。勉強とアルバイトに忙しく、これまで一度も
実家に帰ってきたことはなかったが、先日電話で父親から厳命を下
されたため、渋々戻ってきたのである。仕送りを止めると言われて
はさすがの彼女も逆らえなかった。恵良は乱暴にサンダルを脱ぎ捨
てると家上がった。

彼女の家は町内では旧家として知られる古い日本家屋だった。彼
女は幼い頃から、家の中に漂う空気が苦手だった。特に夕暮れ時は、
一人で家の中にいることが耐えられない気さえた。中学校に進学
した年に亡くなった父方の祖母は、そんな時間帯にはよく「おとな
いさん」が来ると語って恵良を怖がらせたものだ。「おとないさん」
の正体がなんなのかは、結局聞けず仕舞いだったのだが。

恵良はとりあえず二階の自室に向かった。階段を昇ってすぐに納
戸として使われている空き部屋があり、その隣が彼女の部屋だ。ド
アノブに手をかけようとしてなぜかその動きが止まった。なにかを
忘れているような違和感があったが、すぐにそれは消えた。部屋は
出て行った時そのままだった。着替えや化粧品を入れたスポーツバ
ッグをフローリングの床に置くと、なにげなく窓際に目をやった。

ここからの眺めも半年振りだ、そう思いながら窓の下に広がる裏庭を見た。

「ん？ …… なにあれ」

奇妙なものが目に入り、彼女は怪訝な顔をした。裏庭に植えられた招霊オカタマの樹のそばに石が置かれている。そう大きな規模ではない。しかし、上京する前には見たことがないものだ。恵良は部屋を出、階段を降り、勝手口から裏庭に出た。炬燵くらいの大きさの石版が、それを支えるように四方向に配された石の上に載せられている。オブリエのようでもあるが、その意味するところがまったく不明だ。恵良は石版に手を伸ばした。

「そいに触るな」

不意に父の声が聞こえ、恵良は身を竦ませた。振り向くと、法事でもあったのか、そろって黒の礼服を着、強張った表情を浮かべた両親が立っていた。恵良は戸惑いを隠せずに訊ねた。

「あの、えっと、ただいま。ねえ、この石なんなの？ 前はなかったじゃん、こんなの」

「よかがら早よ家人中に入りない。よかか、くれぐれも、そいに触るんじゃないぞ」

父はそう言い棄てると恵良には目もくれずに玄関へ向かった。恵良はばかんとして彼を見送っていたが、すぐに頬を膨らませて母を見た。

「なにあれ！ 帰って来いって言うから帰ってきてやったのに。超機嫌悪くない？ もう、わざわざ帰ってくるんじゃないかった、課題だつてあるのに」

母は恵良の腕を取った。その手はひどく汗をかいており、しっとりと湿っていた。

「恵良、あんた、いつまでいられるん」

「え？ この週末かな。月曜には帰るつもりだけど」

「…… そうなん。やい巧くいくかもしれんけんね」

母の謎めいた言葉に恵良は訊き返していた。「は？ 巧くいくつ

て……なにがよ」

恵良は風呂から上がるとさっさと自室に引き上げ、ベッドに威勢良く仰向けになった。枕元に置いた携帯電話をつかむと早速東京の友人、阿夜に電話をかける。寝転がったままの会話が始まった。

「あ、阿夜あ、あたし、恵良。今日ってお店の日じゃない？」

いつもと変わらぬ阿夜の気さくな声が聞こえる。

「大丈夫、今日はシフト入ってないから。……ん、そう、恵良よ。

……あ、ごめん」

恵良はにやにやと頬を緩めた。「ははあん。いま黎君^{れい}一緒にしょ。お邪魔だった？」

阿夜の含羞むような声が返事をする。

『そ、そんなことないわよ別に。それよりお疲れ、東京から九州なんて超遠いよね。何時くらいに着いたの』

「意外に早かったよ、ええと――」

壁の掛け時計を見上げた恵良は眉根を寄せた。

「あれえ？ ……やだ、時計止まってんじゃん。もう、あたしが春に家出てから一回も調整とかしてないから……」

彼女は掛け時計を外すためにベッドから降りた。同時に枕が転げ落ちた。拾い上げた拍子に窓辺のカーテンが揺れ、裏庭がちらりと目に入った。昼間と同じあの石がそこには鎮座しているようだが、暗闇ではほとんど見えなかった。

『恵良？ どうしたの』

訝しげに訊ねる阿夜。恵良は時計を外しながら一氣にまくし立てた。

「それがさあ……うちの親、ちょっと変なの。どうしても一度帰って来いっていうから課題も放り出して来たっていうのに、いざうちに着いてみたら超機嫌悪くて。特にパパが。なんなのって感じたよ、

庭に変な石置いててさ。あたしがちょっと触ろうとしたらすごい怒るの。それにママも、いつまでいるのって訊くから週末いっぱいって言ったら、じゃあ巧くいくかもとかわけわかんないこと言っし。謎過ぎない？ ていうかさっさと帰りたいよ、まじで」

『ふうん？ …… 確か恵良の実家ってけっこう古いお家なんだよね。なんたる、お見合いかなんかさせる気とか』

恵良の手から時計が床に滑り落ちた。彼女は慌ててそれに手を伸ばした。

「冗談でしょ！ あたしまだ十九だつつの。もう、変な冗談やめてよね阿夜」

阿夜は楽しげに笑い声を上げている。

『ごめん、つい。でもさ、じゃあなんなんだろうね、その石ってどんなの？ 大きい墓碑みたいなの？』

「……それっぽくはないと思う。なんかね、炬燵の天板みたいな……ほら、子どもの頃、平たい石でテーブルとか作んなかった？ おままごととかする時に。どっちかっていうとあんな感じ」

見えないとわかつてはいたが、恵良はなんとなくカーテンを開けて裏庭を覗いた。

『恵良？ …… 恵良、どうしたの？ 恵良？』

恵良は答えなかった。その手から、先ほどの時計のように、携帯電話が滑り落ちた。受話口から阿夜の声がか細く聞こえてきたが、彼女の耳にはすでに入っていなかった。

「四人……」

裏庭を見下ろしたまま、恵良は誰に言うともなくつぶやいた。

その3

守門はすっかり冷めたコーヒーをすすり込むと、興味深げに自らの頬を撫でた。

「ふむ……その恵良って子、大宰府市の出身だって言ったな。なるほど、九州北部か。符号が合うと言えば合う話ではあるが……」

阿夜は目を見開いた。コーヒーカップを両手で挟み込みながら守門に急き込んで訊ねる。

「どういうこと？　なんで大宰府市だと納得いつちゃうの」

守門は学者の顔になり、ゼミの学生相手にするように人差し指を立ててみせた。

「ドルメンという言葉聞いたことはないか？　阿夜」

まったく耳馴染みのない単語に、阿夜は眉根を寄せた。

「ドルメン？　……ドルマンスリーブならわかるけど。なにそれ。全然知らない」

「そうか。ドルメンていうのはつまり墓だ。巨石墓の一種で、日本語で言うところの支石墓、つまり基礎となる支石を数個、埋葬地を囲うように並べ、その上に巨大な天井石を載せるっていう形態を取る。朝鮮半島から日本に伝播した埋葬法で、時代としては縄文から弥生初期のものだ。特に九州西北部で多く遺構が見つかった」

支石墓は世界中にあるが、ヨーロッパ、朝鮮半島、そして日本ではそれぞれ特徴が異なっている。たとえば総じて巨大化の傾向にある他国の支石墓と違い、日本の場合は小型化が著しい。屈葬や甕棺の採用などもその相違点のひとつだ。

「特に東アジアの場合だが、支石墓は大雑把に言って二種の形態によって分類される。高くそびえるテーブル式と、支石の方は地下に埋没させて天井石を低くした碁盤式という風にな。いまの君の話に、ままごとで使うテーブルみたいな形って言葉が出てきたらどう？」

それから考えると、その彼女の家の裏庭に置かれた石つていうのはおそらく支石墓の一種、それもテーブル式のものと考えて間違いないと思う」

ただその場合、大きな疑問点が残されることになるが――と守門が口にする前に、感心したような阿夜の声がそれを遮った。

「そつか……そう言えば黎も、昔どこかでそんな形の石を見たことがあるって言ってたっけ。あれきつと支石墓のことだったんだ」

阿夜が口にした耳慣れない名前に、守門はふと訊き返した。「レイって？ 君の友人か」

「え？ ああ、違う違う、彼氏。あたしの」
「えっ……」

守門は呆然と口を開けた。阿夜はカプチーノを飲み切り、カップを置いた。きよんととして守門を見つめている。

「なに？ そんな驚くこと」

「……いや。そうか……君も、そう言われればもう二十歳だし……彼の一人や二人いてもおかしいことはないか……」

阿夜は慌てて手を振った。

「二人はいないし。それにあたし今年で二十一だし。……あ、お兄ちゃん、あたしのことずっと小学生くらいの感覚で見てたんでしょ。まあね、別れた時、確かにあたしまだ十歳とかだったもん。気持ちわかるけど、さすがに順応してよ」

守門はなぜか胸を抉られるような深い衝撃を覚えていた。阿夜の言うとおり、その変化はごく当たり前のことに過ぎないと頭ではわかってはいるのだが……。

「そいやお兄ちゃんの方はどうなの？ 彼女。あ、もしかして結婚……はしてないか」

阿夜は守門の左手に無遠慮な視線を注いだ。守門の中で、理由のわからない苛立ちが急激に込み上げた。

「君には関係ないだろう。それに、いまの話ともな。……そろそろ午後のゼミの開講時間なんで、悪いが私はこれで戻るよ。じゃあ、

また」

そう言うなり彼はトレイを取り上げ、席を立った。阿夜は守門の文字どおりの豹変に面喰らい、啞然として彼を見上げた。「え？

……なんで……あたし、なんかまずいこと言った？」

守門はトレイを返却すると、足音も荒々しくカフェテリアを出て行った。

寺脇克は教授棟の階段を駆け上がり、慌てふためいて考古学研究室に飛び込んできた。守門の後輩であり、教え子でもある東亜大の院生で、彼と同じこの研究室に所属している二十三歳の青年だ。

「大変ですよ教授、小宮山先輩。ぼくいま、信じられないもの見ちゃいました」

そう言うなり息が切れたのか大きく背中を上下させている。映像資料を閲覧していた山際は、なにごとかと小型テレビから目を離した。

「なんなんだね一体、騒々しい。少し落ち着きたまえ、寺脇君」

彼の二年先輩に当たる女子院生、小宮山哉子かなこも、冷やかな眼差しを彼に向けている。寺脇は息を継ぎながら口を開いた。

「も、諸橋先生が、カフェテリアで……女の子とお茶してたんです。一対一で」

山際の目が光った。「なに？ ……それは本当かね、寺脇君。見間違いでは……」

寺脇は大仰に首を横に振る。「諸橋先生みたいな目立つ人、見間違うなんてあり得ませんよ。しかも学内で。本当なんです、しかも相手の子、この大学じゃ見たことないくらい可愛い子で……まるで人形かなんかみたい。あの子、先生の彼女なんですかね？ ていうか絶対そうだと思うんですよ、あんな表情の先生、初めて見ましたから」

山際はあごに手を当ててつぶやいた。思い当たることがあったためだ。「人形のように可愛らしい？ …… ああ、それはもしかして

……」

「諸橋先生の妹さんでしょう。二時間くらい前に研究室を訪ねてらしたから」

予期せず哉子の声がそれに答えた。若干冷たい口調だった。寺脇は拍子抜けし、呆気に取られて彼女を見つめた。

「い……妹オ？ へ？ 先生、妹なんていたんですか」

「私も知らなかったけれど、そのお嬢さん、先生のことお兄ちゃんて親しげに呼んでたもの。山際教授はご存知でしたの？ 先生の妹さんのこと」

山際はとぼけたような顔つきで哉子から視線を逸らした。

「いや、まあ、むろん知ってはいたがね。しかし、彼女は……」

そう言いかけた時、部屋のドアが乱暴に開いた。入ってきたのは噂の張本人、守門だ。全員が自分に注目しているのに気づき、訝しげに彼らを見回した。

「なんです、みんなして。私の顔になにか……」

寺脇が真っ先に守門に詰め寄った。院に進む前まではラグビー部に所属していたというだけあって、その体格はかなり立派なものだ。守門は圧迫感を覚え、思わず後退りした。

「先生！ さつきカフェテリアで一緒にいた女の子、先生の妹さんって本当ですか」

守門はあからさまに不機嫌な顔になった。そして短く言い捨てた。

「——ああ、そうだ。不肖の妹だ。それがなにか？」

山際は驚いて守門を見た。「君、諸橋君、安寿君は君の——」

「妹さんなんですね！ さすが先生の家系ですね、ぼくあんな可愛い子初めて見ましたよ。じゃあもしかして、妹さん、フリーだったりますか？ 体育会系ってどうですかね、彼女？」

守門は自分の研究机の上から講義用の教材を手早く取り上げた。それから寺脇に向かい、にっこりと微笑した。

「だめだな。あいつは彼氏ボーイフレンドが十人ほどいるらしい。……では教授、

ぼくはゼミの与講に行きますので、あとはお願いします」

ぽかんとして彼を見送る寺脇。一方、山際はいくぶん呆れたようにまじまじと守門の後ろ姿を眺め、独りごちた。「あれは……彼女に対するある種の近親者としての保護意識か、それとも——」

どちらにしろ、冷静沈着を絵に描いたようなあの青年が、あそこまで感情を露わにする姿はそうそう見られるものではない。こりゃ、おもしろくなってきたわい——山際は自分でも知らぬ間ににやにやとほくそ笑んでいた。

その4

三日後、守門は再び「カバレ・ガルシア」を訪れていた。阿夜の話にはまだ続きがありそうだったし、それに彼自身、阿夜に会いたくなっていた。携帯電話の番号やメールアドレスはお互い交換し合っていたが、阿夜からはあれきり連絡はなかった。もしかしたら先日のカフェテリアでの守門の態度に怒ってしまったのかもしれない。そうだとしたら、彼としては弁明もしておきたいところでもあった。「私は東京での彼女の保護者役なんだ、だからつい言い方がきつくなったりするわけで……」

彼は夜の席と名づけられた一角に通された。なめしたような黒のびろろどが張られた席だ。マダム・ガブリエルに阿夜を呼んでくれるよう頼んでから、彼はぶつぶつと孤独なりハーサルを繰り返していた。間もなくして現れたのはしかし、阿夜ではなく先日の訪問の際には目にしなかった男^{ホスト}だった。

「こんばんは。諸橋守門先生ですね。東亜大文学部の」

男は微笑した。守門と並ぶくらいの長身が人目を惹く、薄茶色の長い前髪をワンレン風に垂らした、中性的な風貌の美青年だ。二十歳はいくらか過ぎていないに違いない。どういうコンセプトなのか、或いはオーナーの個人的な趣味なのか、ローマ帝国の兵士をモチーフにしているらしい赤いドレープやレザークルト付きの白のチュニツクをまとい、グラディエーター風のサンダルを履いている。守門は戸惑いを隠せずに彼を見た。

「ああ、そうだが……君、どうして私を？」

「阿夜から聞いたんです。ああ、グレンリヴェットを、こちらの方に」

彼は黒服のスタッフに指示をしてから守門に向き直った。

「ぼくは西行^{サイキョウ}黎^{レイ}と言います。ここでの呼び名はレイ。どうぞよろし

く、先生」

そう言つと黎は厳かに頭を下げた。守門の脳裏に閃くものがあつた。

「こちらこそ。……もしかして君、阿夜と付き合つてるっていう……」

「ええ。三年ほど前に知り合つて、それから交際しています」

黎は含羞むように微笑んだ。世にも麗しい表情だった。守門の胸中がまたしても複雑にざわめき始めた。

「古代史がご専攻と聞きました。それで阿夜にもいろいろ手ほどきをしたとか」

守門は黎が注いでくれた琥珀の液体を一口含んだ。彼のような美しい青年に手ずから酌をされるといふのはなんとも妙な気分だった。「手ほどきというほどのこともないが……そうか、阿夜の話に出たのはこの店に勤めている同僚の女の子だったな。じゃあ君もその子のことを？」

黎はわずかに肯いてみせた。

「一週間前に東京に戻ってから、恵良は確かに様子がおかしいんです。無断欠勤も数回しているし。心配していたところ、ちょうど阿夜があなたと再会したというわけですよ、先生。その手の知識なら誰よりも豊富でしょう？ 遺跡や民俗学といった方面には」

「それなりにはな。だが、役に立てるかどうかは……」

そこへ衣擦れの音をさせながら阿夜が現れた。藍色の裾の長いドレスに同色のヘッドピースという姿は中世ヨーロッパの王女を思わせる。黎と同じく店のコンセプトはわかりづらいものの、その高潔な愛らしさに守門は一瞬目を奪われた。が、すぐに咳払いをし、真顔に戻った。阿夜は笑顔で彼の隣に座った。

「お兄ちゃん、また来てくれたんだ。しかもご指名ありがと」

どうやら怒つてはいないようだ。守門は内心、ほっと胸を撫で下ろしていた。

「いや。それより、この前の君の話だが、まだ続きがあるんじゃない

いのか。それが気になって」

半分は——いや八割は阿夜に会うための口実のような気もしていたが、彼女の友人に起きた異変に学者として興味を惹かれたのもまた、厳然たる事実だ。阿夜が口を開こうとした時、黎が音もなく立ち上がる気配がした。

「では先生、ぼくはこれで」

「え？ …… ああ、どうも」

「黎、行っちゃうの。ここにいればいいのに」

阿夜は名残惜しそうに彼を見ている。黎は困ったように笑った。

「男性のお相手は君に任せるよ。新しいお客様もいらしたようだしね」

そのせりふどおり、じきに店のドアが開き、年配の女性客が数人連れ立って入店してくるのが見えた。守門は訝しげに彼を見上げた。客が来るのが前もってわかっていたような口ぶりではないか。

「また見たんだ？ …… じゃああとでね、黎」

よほど黎に懐いているのか、阿夜は少し淋しげに彼の後ろ姿を見つめている。守門はその様子に若干の苛立ちを覚えながらも訊かずにはいらなかった。

「阿夜、見たつていうのは？ なんのことだ」

「え？」

阿夜はきょとんとして守門を見返した。守門はさらに苛々と繰り返した。

「いま、彼に言つてただろう。また見たのかつて」

「——ああ、あれ。うーんと、どう言つたらいいのかな。黎はね…

…」

阿夜は言葉を探しているのか、落着かない風に視線を巡らした。その時、控え室の方から焦ったようなマダム・ガブリエルの声が聞こえた。「ちよつと、だめよ恵良ちゃん！ 普段着でフロアに出るなんてなに考えてるの」

「恵良？」その言葉を耳にするなり阿夜は立ち上がって同僚の元へ

と足早に向かった。フロアメイクも施していない、ほぼすっぴんの恵良が、控え室の扉を開け放してぼんやりと立っていた。彼女は肩が広く開いたセクシーな白いワンピースを着ていたが、それはオーナ―の言葉どおり店の衣装ではなく自身の私物のようだ。

「恵良、どうしたのよ、一体」

阿夜は不安そうな顔をして彼女に訊ねた。恵良の反応はない。どこを見ているのか、呆けたような眼差しをに彷徨わせたまま、ふっくらとした唇を僅かに動かした。

「四人……四人、必要なの。――そうでしょ、お姉ちゃん」

「え？ なに恵良、それなんのこと？」

阿夜は眉を顰めて問いかけた。恵良の表情は瞬時に変わった。彼女は驚いたように阿夜を見ている。

「なに、阿夜？ ちよつと近いんだけど」

自分の肩をつかんで詰め寄っている友人に、恵良は面喰らっているらしい。わけがわからないのは阿夜だ。

「ちよつと……恵良、どうしちゃったの？ いまのなによ、四人必要って」

「はあ？ なにそれ。ていうかやば、あたしメイクもしてないんじゃない。衣装も着てないし。なんで？」

恵良は明らかに混乱している様子だった。マダム・ガブリエルが目を瞬きつつも恵良の腕を引いた。

「恵良ちゃん、とにかく、フロアに出るならきちんとしてちょうだい。話はあとで聞きますからね」

「はあ……でも……」

マダムは恵良を控え室に押し込むとドアを閉めた。そしてため息をついた。

「困るわね。恵良ちゃん、一体この頃どうしちゃったのかしら。ねえ安寿ちゃん、あなたなにか知らない？」

阿夜の方が誰かに訊きたいぐらいだった。彼女は客席に視線を向けた。頼りの黎は、最近彼目当てによく店を訪れる六十代の女社長

とその取り巻きのグループにかかりつきりだ。仕事とわかつてはいるが、なんとなくおもしろくない心持がした。なにしろ彼らの中にはそこそこ若そうな女性も一人二人、交じているのである。阿夜は踵を返すと守門の元へ向かった。

「——ごめん、お兄ちゃん。でも見たでしょ？ いま。あの子がこの前話した恵良。ちよつと様子変でしょ」

一部始終を観察していた守門は肯いた。

「そうだな。心ここにあらず、って感じだった。しかも一瞬で我に返ってる。なにが彼女をそうさせたんだろう」

阿夜は口元を人差し指で押さえ、思案げにつぶやいた。

「そつえば、さつき恵良、なんか独り言言ってた。四人必要とか何とか」

阿夜の言葉に守門は眉を寄せた。「四人必要？ なんだそれは、一体。禅問答か？」

「あたしに訊かれても。恵良になにそれって訊いたら、そう言ったのすら憶えてないみたいだったし。もう……わけわかんないよ、どうなってるの」

阿夜は途方に暮れた顔で守門を見た。守門はゆつくりとあごを撫でた。恵良の家にあるという支石墓らしき形態の石の話がふと脳裏を過ぎった。

その5

三限の講義が終わると、恵良は慌しく教室を出、急ぎ足で階段を駆け下りた。今日は三時から八時まで、駅ビルのCDショップでのアルバイトが入っているのだ。そのあと十一時から「カバレ・ガルシア」の接客。深夜三時まで、文字どおり寝る間もないスケジュールが詰まっていた。正直きつかったが、二回も無断欠勤をしてしまった手前、休みたいと申し出るのは気が引けた。もっとも「カバレ・ガルシア」のフロアに立つのは、社交家の彼女にとってはむしろ愉しみでもあったのだが。

——無断欠勤？　嘘でしょ、あたしがですか？　全然憶えないんですけど。

恵良はふと眉を曇らせた。数日前にマダム・ガブリエルから電話が来、体調でも悪いのかと神妙な調子で切り出された。そしてなぜ店に来なかったのかと訊ねられた。恵良には身に覚えがなく、ただそのことを必死で繰り返した。寛大なオーナーは苦学生並みに多忙な恵良の身体をむしろ案じているようで、彼女を責めもせずに赦してはくれたのだが、恵良自身にはかすかな不安が残った。親友の阿夜でさえ同じことを言ったからだ。

「でもまじでまったくそんなことした記憶ない。……これってやばいのかな」

恵良は思わず独りごちた。最近話題の若年性アルツハイマー？

……嘘嘘、いくらなんでも若年過ぎるって。校舎を出たあたりで、彼女は不安をかき消そうと大きく頭を振った。その勢いで、金髪のショートヘアに軽く留めておいたヘアピンが外れて飛んだ。拾おうとして屈んだ時、先に大きな手が伸ばされたのに気づいた。

「——久しぶりやね、曾我」

懐かしい声がした。ピンを拾ってくれたのは見憶えのある青年だ。恵良は目を丸くした。

「さ……さっちゃん？ な、なにしてんのあんだ……ていうかなんでここにいのよ」

青年は照れくさそうに頭を掻いた。

「いや、その……曾我が東京に来とるっち聞いたんで、顔、見に来た。……心配やったけん、ちょこつと」

恵良は絶句した。まさか東京で会うとは思ってもいなかった相手だ。そもそも彼のいまの返事は答えになっていない。

「違うでしょ！ なんてあたしがこの学校に通ってるって……ちよつと、もしかしてうちの親に聞いたわけ？」

彼はやや申し訳なさそうに肯いた。恵良は全身のため息を吐き出した。

「さっちゃん」こと佐々^{ささ}瞭^{りょう}は、恵良の小学校時代から現在に至る友人で、いわゆる腐れ縁の相手だ。のみならず、恵良にしてみれば彼については多少気まずい記憶もあった。高校二年の体育祭で恵良は彼に告白されたのだが、東京の専門学校に進学する意志を固めていた彼女はそれを断ったのだった。二人の関係はそれ以降ぎこちなくなり、一足先に瞭が卒業するまで口を利くこともほとんどなくなつた。

「こん前、実家に帰ってたつて聞いた。……連絡くれれば良かったんに」

瞭は真顔で恵良を見つめた。恵良は目を逸らした。

「あんたに連絡する理由なんてないでしょ。ていうか……まじ、なんでわざわざ来たわけ？ うちの親に様子見てくるよう頼まれたの？ あんたがご近所の息子で小学ん時から顔見知りで、信頼されるから」

「……お前の両親、お前のことばり心配してた。俺の大学はいま夏休みやけん、お前の様子ば見てきて欲しいって頼まれたんやけん」

風の便りに聞いたところでは、瞭の通っている大学は福岡にある理系の国立大だ。二年生といえどそれほど閑なわけではない。恵良はさすがに申し訳ない気がした。

「——ごめん。迷惑かけたよね。でも平気だから、別にあたし、体調も悪くないし。さっちゃん、ほんとは忙しいんでしょ？ 帰ってもいいよ、うちの親にはあたし超怒つとくから」

そう言っぴんを受け取ろうとした恵良の手を、瞭は咄嗟に握りしめた。恵良の心臓がにわかに跳ねた。

「顔色、良くなか。無理しとるんじゃないか」

瞭は心配そうに恵良の顔を覗き込んだ。恵良は慌てて首を横に振った。

「平気だつて、まじで。ちょっとハードスケジュールなだけ。でもバイトくらいあんだだつてしてるでしょ」

瞭は恵良の手を離そうとはせずに答えた。

「バイトば掛け持ちしとるんか？ どげん内容の？ ばりきつか仕事なんじゃなか」

「そんなことないつて、別に。これから行くのは駅んこのHＭＶだし、そのあとは新宿の——」

そこまで言いかけて恵良は口を押さえた。瞭は耳聡く反応を示した。

「新宿と？ 新宿なん仕事？」

「いや、えつと……接客よ、接客。その……まあ、カフェ……かな」

恵良はわざとらしい笑みを浮かべた。瞭はじつと彼女を見つめている。

「そいは何時がら何時ん仕事なん。カフェなら俺も一緒に行く。場所ば教えてくれ」

恵良は仰天し、後退ろうとしたものの、右手を瞭に押さえつけられているためそれもできず、仕方なく彼を睨みつけた。「ちよつと、とにかくこの手離して。痛いんだけど」

「時間と場所ば教えてくれたら離すけん。曾我。俺もこんまま帰る

わけにはいかん。君ん両親にきつちり報告ばせんといかんし」

「……」

恵良は観念し、小さく息をついた。そしてつぶやいた。「変わってないね、あんた」

眠らない街、歌舞伎町の灯りがようやく弱弱しさを帯び始める深夜三時半、私服に着替えた恵良は「カバレ・ガルシア」の裏口から通りへと出た。そこに予想どおり瞭の姿を見つけ、いかにも迷惑そうに眉を顰める。

「出待ちされても困るんだけど。あたし、タクシー拾うから、そんなじゃね。バイバイ」

そう言い棄てると表通りに回り、さっさと歩き始める。そのあとを瞭は無言でついてきた。恵良は苛立ちを抑え切れず、振り向いて怒鳴った。

「言いたいことあんならはつきり言えば？ 水商売おみずだとは思わなかった？ 幻滅したんでしょ、ならもうあたしに付きまとわないで！

高校の時とは違うのよ、迷惑なの」

一気にまくし立てると恵良は黙り込んだ。瞭はそんな彼女をじっと見つめてつぶやいた。

「……家まで送る。タクシー拾おうとよ」

「一人で帰れるわよ。ほつといてよ……もう」

「放つてはおけなか。昔、そんで後悔したけん。……もう二度と同じ思いはしたくなか」

瞭は微笑した。恵良の手を握り、折りよくやってきたタクシーをつかまえ、彼女とともに乗り込んだ。十分ほどで、東中野にある彼女のアパートに到着し、恵良は車を降りた。そしてぶっくらばうな口調で瞭に言った。

「早く降りなさいよ。話とか、他にもあるんでしょ」

「えっ……ばってん……」

「あんたのことなんて男とは見てないから。——別に、来たくないなら無理にとは言わないけど」

恵良は踵を返し、アパートの階段を昇り始めた。一呼吸起き、すぐに瞭が続く気配がした。彼女は努めて平静を装いながら鍵を取り出し、自室のドアを開けた。三和土でサンダルを脱ぎ、背後を振り向く。

「なにしてんのよそんなところで。さっさと入りなって」

これ以上ないほど緊張し切った顔つきの瞭に、思わず恵良は嘖き出した。

「あたし、あんたのこと誘ってるわけじゃないから。そんな硬くなるだけ損だよ。ほら、早く」

瞭は真っ赤になった。そんな彼の態度に、恵良はなぜか気持ちごと和んでいた。ベッドやテレビなどの生活用品が置かれたリビングルームに続く小さなキッチンに入り、冷蔵庫から二リットルボトル入りの烏龍茶を取り出すとグラスに注ぎ、じかに瞭に手渡した。自分も一口飲んでからベッドに腰掛ける。先に口を開いたのは瞭だった。「初め……びっくりした。髪も短く、しかも金髪になっとったし」

そう言われ、恵良はサイドの髪に軽く手を当てた。

「そっぴいあたしって高校ん時はずっとロングだったっけね。校則厳しくて染めることもできなかったし。逆によくわかったよね、それなのに」

「——なんぼ変わっちてもお前はお前やけん。見間違えたりなんかせん」

瞭は言った。恵良を真っ直ぐに見つめるその眼差しは、彼女がよく知る高校時代の彼とまったく同じものだった。恵良はふと目を細めた。

「……あんたも変わってない。すぐわかった、さっき学校の門のところで会った時」

小学校、中学校、高校と、二人の縁は途切れることなく続いた。

瞭は運動神経が良く、高校時代はサッカー部に所属し、二年生になつてからは部長も務めていた。短く刈り込んだ頭に切れ長の一重と、素朴ではあるが容姿も悪くなく、彼に想いを寄せる女生徒は同学年にも下級生にも複数存在した。

一方の恵良は、気取りのない実際の性格とは裏腹に、旧家のお嬢様として周囲には見られていた。小柄で黒髪の可憐な姿は男子生徒からの評判も高く、特に高校に入学して以後、学内でのイベントがあるたびに彼女は誰かしらの告白を受けていた。

「やけん俺は焦ったんや。……小学校がら好きだったお前ば誰かに獲られるって思った。やけん自分に嘘ばついたとよ」

恵良の胸がざわめいた。あの時のことを――彼から交際を申し込まれた時のことを鮮明に思い出したためだ。

「さっきの店も、びっくりしたけど、悪か店とは思わんけん。……お前も、ばりきれいやった。あんどレス、ばり似合つとった」

今日の彼女の衣装は、「不思議の国のアリス」に出てくるトランプの女王をイメージしたゴージャスなドレスだった。予期せぬ褒め言葉に恵良の頬が心なしか染まった。

「ずっと自由にお前らしくしとるんだなって思ったとよ。高校ん時よりも、ていうか九州にいた頃よりも」

「……なによ。様子見に来たんじゃなくて、口説きに來たわけ？ 懲りずもせずに」

恵良はふざけてそう言った。しかし瞭は真顔のまま答えた。

「――そうや。お前のこと……ずっと忘れられなかった。いまでも好きだ……曾我」

恵良は口を開こうとして、しかしなにも言えなかった。ただ微笑して瞭を見つめた。

「ばあか。そういうチャンスはね、一度きりなの。あんた虫が良すぎ。あたしにもうとつくに彼氏いるって考えない？ 普通」

瞭は怯まなかった。恵良の目を射抜くかのようにじっと見つめている。

「いても関係なか。後悔したくなかって言ったやろ。……俺はお前のことが好きだ。好きだ、曾我」

「……」

恵良の瞳が潤んだ。なぜなのか自分でもわからなかった。彼女はベッドから降り、瞭の前に座った。静かに彼の目を見つめ、その手に自らの手を重ねた。エアコンは効いていたが、瞭の手はひどく汗ばんでいた。どれくらいの時間が経ったのか、やがて二人はどちらからともなく、無言のまま唇を重ねていた。

その6

守門はゼミの終講後、研究室に戻ると書架を片っ端から漁った。

支石墓に関する古今の論文や資料を検めるためだ。しかし、思ったような成果は得られなかった。支石墓文化成立の起源にはすでに定説があり、そもそも異聞というものが一般に存在しないからだ。守門は息をつき、独りごちた。

「それにしても引つかかるな。なぜ墓じゃなきゃいけないんだ？」

阿夜の話聞く限り、恵良の家の奇妙な石組みは、その形態から支石墓としか思えない。しかしあれはあくまで墓である。誰も死んでいないはずの恵良の家で、なぜ唐突にそんなものを^{しっぺ}拵える必要があったのか？ 守門は眉を寄せた。それとも——実は死人が出ているのか？

守門は携帯電話を取り出し、カレンダー機能を呼び出した。恵良が里帰りしていたという時期は盆と重なっている。これはなにかの符号だろうか。記憶の彼方に、昔どこかで聞いた話が霞んで漂っていた。大学に入ったばかりの頃、一般教養の授業で山際から聞いた奇談だ。確か「風土記逸聞^{ふどきいつぶん}」の一文だった。

「そういえば一昨日、阿夜が言っていたな。あの恵良って子がおかしなことを口走ったって」

胸騒ぎがした。時計を見るとすでに九時を回っている。「^{キャバレー}カバレ・ガルシア」の営業が始まった頃だ。守門は彼以外誰も残っていない部屋を片付けると電気を消し、施錠を済ませて教授棟を出た。

蓉子は階段下に座り込み、踊り場をじっと見つめた。「見る」こととでなにかが現れると信じているかのように。電気を点けていない

ため、勾配の急な階段は、上層へ行けば行くほど闇が濃くなり、目に映るのはただ真つ暗な空間だけだった。彼女はふと思い出していた。

この暗く急な階段を恵良はずっと怖がっていた。いや、それは親である蓉子自身も同様だ。そしていまも彼女は恐れていた。――恐れる？ 違う、恐れてなどいない。なぜ親の私があの子を……彼女は懸命に頭を振った。私はただあの子に帰ってきて欲しかっただけ。ただそれだけだ。それなのに――。

「なんばしとる、こぎゃんところで」

蓉子は心臓が止まる思いで飛び上がった。振り向くと、沈鬱な顔の夫、修造が立っていた。彼は無骨にあごをしゃくつてみせた。

「おかしなこつば考えるな。もう終わつたとよ。これで済んだったい。……恵良は、あん子は大丈夫やけん、お前が心配せんでも」

「……ほんなこや？　ほんなことこれで終わつたと？」

蓉子は夫に縋りついた。そして踊り場を見上げた。

「当たり前やけん。そんなためにわざわざ恵良は呼んでもういっぺん儀式ばしたんやなかか。入院しとる親父まで無理に連れち来て」

修造は蓉子の肩を抱き、不吉な考えを思い切らせるように居間へと戻った。しかしここ数日、祈るような気持ちで過ごしているのは彼も同じだった。彼はぼつりとつぶやいた。

「……恵良はこん家ば離れたし、そいに佐々君の東京まで様子ば見に行つちくれとる。心配せんでもよか」

蓉子は弱弱しくも笑顔を見せた。家の中といえど夏の盛りの宵は蒸し暑い。にも関わらず、二人は寄りそうように卓袱台の前に座った。蓉子のか細い問いかけが聞こえた。

「あん子はどげんなりよつたんやろ。……未良は」

修造はなにも答えなかった。

昨日に引き続き、瞭は「カバレ・ガルシア」を訪れていた。彼の純朴な人柄をマダム・ガブリエルはいたく気に入ったらしく、衣装に着替えて控え室から出てきた恵良を上機嫌で呼び寄せた。

「恵良ちゃん、アタシ正直一安心だわ。あなたにあんないい人がいたなんてねえ。ご実家のご両親もさぞお喜びでしょ」

恵良の頬が真っ赤に染まった。

「ちよつと、ギャビイさん、誤解しないでくださいつてば。さ……

佐々はただの友達なんです、別に彼氏とかそういうんじゃないです」

「あら、だって昨日も来てたじゃない彼。あなたがいるからでしょ？ 連日で来てくれるなんて女冥利に尽きるわね、恵良ちゃん。……

でもあんまり、店内じゃ私情を絡めないでね。他のお客様の手前もあるわけだし」

マダムは心得たりと言わんばかりにウインクをしつつもオーナーらしく牽制を忘れなかった。恵良はため息をつき、それ以上の弁明をあきらめ、フロアに出た。客席に座る瞭の寄越す痛いほどの視線を感じ、彼女らしくもなく含羞んで俯いた。

「そんな心配しなくても平気だつてば。昨日も見ててわかったですよ、ここは普通の風俗店とはちよつと違うんだから。下品な客とかほとんどいないし、特に危ないこともないんだし」

恵良は瞭に軽めのマイルドエールを供した。飲酒年齢に達していない彼女自身はまだアルコールを口にはできない。恵良はポピュラーなノンアルコールカクテル、シンデレラをスタッフに運ばせ、瞭と乾杯をした。

「わかつとるよ。ちよこつとでもお前と一緒にいたいから来てるんや。今日も、ばりきれいや。曽我」

瞭は微笑んだ。恵良の今日の衣装は、ピンク色のベルベット生地であつらえたミニのワンピースで、ロリータチックなイメージの漂う恵良にはとてもよく似合っている。瞭は彼女から片時も目を離さない。照れもあり、恵良は怒ったように語気を荒めた。

「やめてよもう。勘違いしないでよ、あたし、あんたのこと彼氏と

か思ってるわけじゃないんだから。そりゃ、昨日は……ついあんなことしちゃったけど、それだけだからね。キスくらいで彼氏とか思われたらいい迷惑だよ」

そう言うとき恵良はそっぽを向いた。昨夜、彼女のアパートで、瞭は二度目となる真摯な告白を真正面から恵良にぶつけた。その一途な想いに恵良の心は揺れ、自然と唇を合わせていた。しかし、彼はそれ以上のことはしようとせず、恵良に就寝を促すと、自分は彼女に背を向けてさっさとカーペットに横になった。恵良は拍子抜けしていた。手を出さないのは自分にそこまでの魅力がないからかとも思い、無性に腹立たしくなった。

「どうせあたしはまだ子どもだもん。お子様過ぎてそういうことする気にもならなかったんでしょ」

腹立ちまぎれに思わずつぶやいていた。瞭は驚いたように彼女を見た。

「そんなわけなかやろ。俺はいますぐにやってお前ば抱きたい。ここに誰もいなければ迷わんでそうしとる」

思わぬ言葉に恵良の心臓が大きく音を立てた。瞭は彼女の手を取った。

「やけど、俺はお前ん両親に信用されてここに来よるんやけん。…お前は知らなかやろうが、お前ん両親はひどくお前ば心配しとったとよ。まるで、よっぽど恐ろしかこつでもあったごたあに。やけん俺は……」

不意に瞭は黙った。恵良の表情がおかしい。先ほどまでとは明らかになにかが違っている。

「曾我？ ……聞いたるんか、曾我」

「四人。そうだね、いまなら四人いるじゃない」

「は？ なんば言うて……」

瞭は眉根を寄せた。恵良はフロアをぼんやりと見渡している。

「そうね、お姉ちゃん……ここじゃだめだね。人が邪魔だもん。

……ああ、そうだ。いいこと思いついた」

恵良は立ち上がった。そして、阿夜が接客をしている白の席に近寄り、明るく声をかけた。

「こんばんは、お客様。ね、ほんの数分でいいから、安寿姫を貸してもらえませんか？ 三分でいいの」

席に座っているのは、このところ日を置かずに店を訪問している三十代の青年実業家とその連れだ。阿夜が目当てなのは誰の目にも明らかだった。二人は戸惑ったように恵良を見ている。それはむろん阿夜もだ。

「ちよつと恵良、どうしたのよいきなり。失礼じゃない」

恵良はぺろりと舌を出してみせる。

「ごめん。でも三分でいいの、ちよつとだけ付き合つて。……ねえお客様、戻ってきたら安寿姫のとおきおきの秘密をお教えしちゃいますから。いいでしょ」

阿夜は驚いて恵良を見つめた。「ちよ、恵良？ なによ秘密つて勝手にそんな……」

青年二人の表情が変わった。妄想を逞しくさせているのか、生唾を飲み込みながら愛想良く応じる。

「ああ、いいよ。そのかわり約束だぜ、エラちゃん。安寿姫の秘密、絶対教えてくれよ」

恵良は無邪気な笑顔を浮かべて肯いた。阿夜の腕を強引に引つ張りながら、青の席に佇んだままの瞭に声をかけた。

「さっちゃん、あんたも来て」

瞭はわけがわからず、混乱しながらも恵良のあとを追った。恵良は迷いのない足取りで控え室に向かった。するとちよつと男性用の控え室から、黎とともに「カバレ・ガルシア」の男性陣ホストの双璧の一人である成瀬なるせ偲しのぶが着替えを終えて出てきたところに鉢合わせた。恵良の目が妖しく光った。

「偲さん、お願い。ほんの三分でいいの、ちよつと付き合つて」

「え？ 恵良さん、付き合つてなにに……それにそちらの方は、お客様なんじゃ」

有無を言わせぬ口調に惣はなぜか抗えず、不承不承彼女に続いて女性用の控え室に入った。四人が室内に入ったところで恵良は後ろ手にドアを閉めた。彼女は微笑み、三人を見回した。

「ええと……じゃあ人数がそろったところで始めようか。いい？ 一人ずつ、この部屋の四隅に立って。……そう、そしたら時計回りに、順番に前の人のところへ行つて、肩を叩くの。阿夜はドアのとこね、この入り口」

阿夜は呆気にとられて恵良を睨んだ。なにを言い出すかと思えば、接客を中断させてまでこんな他愛もない遊戯をしようというのか。

「恵良、いい加減にしてよ。仕事中なのよ。それにお客様まで巻き込んで……惣さん、出よう。フロアに戻らなきゃ」

ドアを開けようとした阿夜を恵良は素早く押さえつけた。ものすごい力だった。きれいに整え、研磨された爪が、むき出しの阿夜の腕に喰い込んだ。痛みに顔をしかめる阿夜。

「——出たらだめ。いい、阿夜、あたしの言うこときいて。そうしたらすぐに終わるから」

阿夜は言葉を失った。恵良の様子がまたしてもおかしい。しかし、このゲームに付き合えば気が済むというのなら、いつそそうした方が早そうだ。阿夜はため息をつきながらもドアのそばに立った。

「ほら。これでいい？ 恵良」

恵良はにっこりと笑った。そして阿夜に電気を消すように指示をした。蛍光灯が消され、室内は一瞬で暗闇となった。

守門は新宿駅東口を出、歌舞伎町の裏通りを進み「カバレ・ガルスシア」へと向かった。その途中、意外な人物と合流することになった。黒のＴシャツにジーンズというごく普通の恰好をしていたが、まぎれもなく先日店で初めて目通りをした西行黎だ。彼は緊張した顔つきで守門に軽く会釈をし、小走りに歩きながら切り出した。

「ひどく厭な予感がしたんです。いよいよ仕掛けてきたのかもしれない」

守門は眉を顰めた。「仕掛けてきた？ なんのことだ、それは。君はなにか知っているのか」

「わかりません。具体的にはね。でも、気配ならぼくには読める。今夜『ガルシア』の中に、禍々しい空気が収束しようとしているのを急激に感じたんです」

「禍々しい空気って……君は一体、なんの話を……」

黎は苛ついたように守門を見やった。「先生、あなたの専門分野のほうですよ。思い当たることがあったからここに来たんでしょ」そう言うなり、黎は守門に先立って駆け出した。そして店の裏口まで来ると躊躇なくドアを開け、中に入った。守門も彼に続いた。裏口は二部屋ある控え室に直結しており、黎は躊躇なく女性用の部屋のドアノブに手をかけた。彼の顔が強張った。

「どうした、西行君？ 早くドアを……」

「開かないんです。施錠されてるのは違う。……やっぱりだ、すでにこの中は異界と化してる」

「なんだって？」

守門は顔色を変え、黎を押しのとドアノブを握り、渾身の力を込めて回そうとしたが、彼の言葉どおりそれはびくともしなかった。黎は言った。

「中には阿夜がいる。恵良が……いや、恵良に取り憑いているなにかが、より邪悪なものを呼び出そうとしてるんです、おそらく。どいう方法でかはわかりませんが、一刻も早くドアを開けないと、阿夜が……」

黎の表情がいつそう緊迫している。阿夜と聞いて守門はさらに焦った。彼はドアを叩いた。そして怒鳴った。

「阿夜！ 聞こえるか、阿夜！ ここから出る、ドアを開けるんだ！」

応答はない。守門は必死でドアを叩き続けた。なにごとかとマダ

ム・ガブリエルが現れ、異様な騒ぎに目を剥いた。

「も、諸橋先生？ 厭だ、こんなところでなににして……黎ちゃん、一体どういふことなの、黎ちゃん」

黎は答えず、阿夜の身を案じて唇を噛んだ。守門は叫び続けた。

「阿夜、頼む、返事をしてくれ！ 阿夜！」

その時、不意になにかが破裂するような音が響いた。手の中のドアが急に軽くなった。守門はノブをもぎ取らんばかりの勢いで床に崩折れている阿夜を見るなり、黎よりも早く守門は駆け出した。阿夜を助け起こし、思いきり抱きしめた。

「阿夜……無事か？ どこも怪我はないか」

阿夜は抱きしめられるまま、彼にしがみついた。いまさらのように震えが止まらない。

「お兄ちゃん……やっぱりお兄ちゃんの声だったんだ。ものすごく遠くから呼んでるのが聞こえたの。でも、後ろに戻れなくて……もう少しであたし……」

守門は阿夜の細い身体を掻き抱いた。子どもの頃でさえそんなことをしたことはなかった。初めて触れる彼女の肢体は、信じられないほど華奢で、壊れもののようにやわらかかった。胸の奥に小さな灯りが燈ったような心持がしていた。

「お兄ちゃん、ありがとう。もう大丈夫」

阿夜は顔を上げて気丈に微笑んだ。そして彼の腕から身を離し、黎の元へと駆け寄った。

「阿夜、良かった。どうにか間に合ったみたいだね」

黎は阿夜を抱き止め、いとおしげに髪を撫でた。守門はそんな二人からなぜか目を逸らしていた。控え室を見回すと、中にはまだ三人の人間がいた。カエサル風の白い装束を着た「ガルシア」のスタッフらしき青年と、恵良。それに彼女の知り合いなのか、しきりに恵良の名前を呼んでいる見知らぬ学生風の男が一人。

「曽我、曽我！ どげんしたと、曽我！ しっかりせんね、曽我」

男は恵良を助け起こし、ひざの上に抱きかかえて叫んだ。マダム・ガブリエルは腰を抜かさんばかりにおろおろと彼らを眺めて頭を抱えた。

「もう、一体なにがどうなってるのよ！　しのちゃん、黎ちゃん、説明して！」

だが証言者足りうるはずの僕は、目眩めまいでも堪えているのか、ぼんやりとした顔つきで額を押さえながら頼りなくつぶやくばかりだ。
「それが……申し訳ありません、マダム。私にもなにがなんだか……恵良さんに言われてこの部屋に入って、ゲームを始めたところまでは憶えているんですが」

「ゲームですって？　なに言ってるのよ営業中に。それにたかがゲームでなんでこんな……恵良ちゃんはどうしちゃったのよ、失神しちゃってるの？　……ああ、もう、今日は厄日だわ、店仕舞いよ」

マダムはヒール音を荒々しく響かせ、フロアへ出て行つた。守門は誰に言うともなくつぶやいた。

「『お部屋様』だな。彼女が始めたというゲームは」

恵良と、彼女を腕に抱く男を除く三人が彼を同時に見た。耳馴染みのない言葉に阿夜は眉根を寄せた。

「『お部屋様』？　なにそれ？　お兄ちゃん。あたしたちがやったのは……」

「『四隅の怪』だろう、阿夜。……先生、なぜそのことがわかったんです。阿夜の話から推測したと？」

黎は静かに訊ねた。守門は曖昧に肯いたが、依然意識を取り戻さない恵良を案じ、彼女のそばで途方に暮れている若い男に声をかけた。

「君は？　彼女の友人かな」

彼は守門を見、混乱した様子で肯いた。

「……そうです。曽我の、地元の友達で佐々つち言います。曽我は……曽我はどげんなりよったんですか。でかい音のしたち思ったらいきなり倒れて——一体なんね起こったんやか」

守門は彼には答えず、代わりに阿夜に問いかけた。

「阿夜、君は？ なにが起きたか憶えてるか」

「うん。電気を消して、恵良からスタートしたの。次がその、佐々さんで、次が僂さん。あたしは暗闇で肩を叩かれたから、そっこの角にいるはずの恵良に……え？」

阿夜はそこで初めて気づいた。四人目の角には誰もいるはずがないのだ。黎が言った。

「君はこのゲームを知らなかったんだね、阿夜。まあその方が恵良には……というより恵良に憑いているものには都合が良かっただろうけど」

阿夜は首を振った。

「違う。違うの、誰かいたのよ。確かに……気配が……暗闇でもわかった、だからあたし、手を伸ばして、肩を叩こうと——そうしたら——お兄ちゃんの声が……すごく小さいけど、音量を絞りすぎたイヤホンから聞こえる音みたいに、それでも聞こえたの。あたしものすごく怖くなって……後ろに戻ろうとしたら、なにか硬い空気に遮られてるような感じがして、戻ることもできなくて」

「そげなはずはなか。曽我は確かに俺ん肩は叩いたし、そんなあと元の位置に戻ったりもしとらん」

瞭は恵良を抱きしめながら反論した。守門は言った。

「そのとおりだ。だから阿夜が感じた気配というのは曽我君のものじゃない。ゲームによって、曽我君に憑いているなにかが異界から呼び起こそうとしたものだ。召喚は成功しかけたが、寸前で破られた。……大きな破裂音がしたが、あの時室内でなにかあったのか」

戸惑ったような瞭の声がそれに答えた。

「わけのわからなかったばってん急に不安になっち、俺は後ろに戻って曽我に手ば伸ばしたんです。そいぎ、あいつが震えるように言うのが聞こえた……怖い、助けてっち。それで俺は夢中で彼女を抱きしめて……直後にちかっばでかい音のしました。なん音かはわかりませんが」

「なるほど。……触媒である彼女のコントロールが解けたせいで、空間にいわば亀裂が入ったんだな。ともかく、彼女をここから連れ出して、家で休ませてあげたまえ。君がそばについていてやるのがいちばんだろうな」

瞭は肯いた。阿夜は恵良の荷物を彼に託し、マダム・ガブリエルが呼んでくれたタクシーに二人が乗り込むのを見届けてから控え室に戻った。店内には客は一人もおらず、先刻マダムが宣言したとおり、今日はすでに閉店の運びとなったようだ。一段落ついたところで店を出ようとした守門を阿夜はつかまえ、詰め寄った。

「待つてよお兄ちゃん。まだわかんないことだらけなんだけど。それに恵良はほんとに大丈夫なの？ さつき黎とお兄ちゃんが言ってた、恵良に憑いてたものって一体なんなの」

守門はしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「わからない。だから私は確かめに行こうと思う。阿夜、彼女の実家は九州の大宰府市だと言っていたな。住所はわかるか」

阿夜は彼を見つめた。そして強い口調で言った。

「わかるよ。——あたしも一緒に行く。連れてつて、お兄ちゃん」

守門は驚いて彼女を見た。しかし阿夜の決意は固いようで、彼の左腕をつかんだまま離そうとしない。こんな時の彼女には説得は無駄だ。守門はため息をついた。

「まったく……強情なところはちつとも変わっていないな、君は」

勝ちを確信し、阿夜は無邪気に笑ってみせた。

その7

午前十一時に羽田を発ち、福岡空港に降り立ったのは午後一時。

二人は地下鉄空港線に乗るため福岡空港駅のホームで電車を待った。二十分ほどして姪浜行きの電車がやって来た。夏休み中ではあったが平日の車内は比較的空いており、守門は阿夜の腕を引いて一隅の席に座った。阿夜は感慨深げにつぶやいた。

「遊園地とか、ちよつとした遠出ならあるけど、お兄ちゃんと旅行って行ったことなかったよね。なんか変な感じ」

「そう言われればそうだな。まあ旅行と言っても今回は遊興目的ってわけではないが」

守門が当時住んでいた世田谷の邸の隣家に可愛らしい女の子が生まれたのは、彼が八歳の時のことだ。高部家の妻は少女のような面差しの若く美しい女で、少年だった守門の目には西洋絵画に描かれる聖母のようにも映ったものだ。阿夜と名づけられた女の子は母親に良く似ており、将来が楽しみだと周りの大人たちはしきりに囁いた。歩けるようになると、商売を営んでいた両親の多忙もあり、一人っ子だった阿夜はなにかと守門の家に預けられる機会が増えた。守門は自分に懐いて甘える阿夜を実の妹のように可愛がっていた。人形や天使を思わせる無垢な愛らしさに、子どもながら惹かれていたのかもしれない。

「その君がここまで大きくなるとはな。……時間つてのはつくづく恐ろしいものだ」

守門はしみじみと頭を振った。阿夜は悪戯っぽい目で守門を見た。「それはこっちのせりふ。お兄ちゃんだってもうすっかり大人じゃない。昔はジャニーズジュニアみたいな初々しい美少年だったのにさ。ほんと、時間つて怖いよね」

守門は苦笑した。阿夜に言われるとは思いもしなかった言葉だ。

「で、本題なんだけど。お兄ちゃん、どうして昨日、お店に助けに来てくれたの？　なんで恵良がおかしくなってることわかったの？」
阿夜はペットボトル入りのミネラルウォーターを一口飲んでから切り出した。

「ああ。君の話と、先日曽我君の様子を見て、思い出したことがあったんだ。彼女、四人必要だと言っていたんだろう？　最初はなんのことだかさっぱりだったけど……昔、私が学生だった当時、一般教養で民俗資料学を取っていてね。その講義中に変わった話を聞いたんだ。出典は確か『風土記逸聞』だった」

——那津なつの国（太宰府市の古名）に某なにかしとぞ云ふ人ありて、忌忌ゆゆしき話伝えけるに、筑前守ちくぜんのかみ（律令制において九州北部、博多地方の統制のため中央政府より派遣された国守）の娘、はやり病にていたづらなれば、その親いと悼み嘆きてすなはちこひとう作りき。骸むくろこひとつに埋むるのち四人すだししかば、四隅をついでにありきたりとばかりして骸の土よりよみ返りぬ。いとむつかしとぞ聞こゆ。

阿夜は眉根を寄せて守門に訊ねた。

「こひとつてなに？　お墓のことなの？」

「おそらくはな。それがはつきりとなにを指しているかはいまでもよくはわかっていないんだが、山際教授は、支石墓のことじゃないかとおっしゃっていた。支石墓が朝鮮半島から伝わってきた埋葬文化だという話はしただろう？　朝鮮語で支石墓は『コインドル』、支えのある石って意味だ。この逸話は九州北部に伝わるものだから、そう思っただけ間違ってないだろう」

守門はさらに続ける。

「娘を亡くした親が、嘆き悲しんで支石墓を作り、亡骸を地中に埋葬する。そして四人、頭数を集めて支石の周囲を順に歩く。すると死体は土の中から蘇った、って話だ。……昔話にしては、いまの状況と重なる部分が多すぎると思わないか」

阿夜は驚きを隠せずに守門を見た。

「だ——だって、それじゃあまるでゾンビじゃん。そんなこと、いくらなんでもあり得くない？」

守門は前方をじつと睨んだ。

「ああ、あり得ない。常識で考えればな。だが、君も昨日身をもって体験しただろう。『ガルシア』の控え室が異空間に変化するのを」

阿夜はごくりと唾を飲み込んだ。禍々しい感覚が鮮やかに蘇り、肌をじつとりと包んでいく。

「でも、その話じゃ死んだ人を生き返らせるためにやったんでしょ？ 恵良の家って誰か亡くなってるの？ それに昨日はじゃあ、なんのために恵良、あのゲームをやるうって言い出したの」

「『お部屋様』を始めようとしたのは曾我君の意思じゃない。曾我君に憑いているなにかだ。亡くなっているとすれば、おそらくは言い伝えと同じように年若くして死んだ者がいるのかもしれない。…これはまだ想像に過ぎないが、彼女は先日里帰りをした際、実家で行われたその儀式に参加し、呼び出されてしまったなにかによって触媒にされているんじゃないかと思う」

「そんな……恵良のご両親がなんでそんなことするの？ どうして恵良をそんな目に……」

阿夜は戸惑ったようにつぶやいた。それではまるで、恵良の両親が確信的に儀式を行い、そのための供犠として彼女を利用したとは思えないではないか。

「理由はいまはわからない。だからそれを確かめに行くんだ」

電車は乗換駅の天神駅に滑り込んだ。守門はおもむろに立ち上がった。阿夜も慌ててそのあとに続いた。

第三章 未良

恵良は階下からじつと踊り場を見上げていた。古い家らしく、勾配のひどく急な階段だ。それにいやに薄暗い。こん階段、好かん。恵良は独りごちた。

「恵良、そげなところでなんばしよつとね」

祖母がやって来た。闊達で朗らかな、恵良の大好きな祖母だ。

「こつちに来^きい。婆ちゃんとおやつば食べんね」

祖母は恵良を抱き上げ、居間へ向かった。炬燵に潜り込み、母が用意してくれたクツキーをかじりながら彼女は言った。

「あん階段、恵良ちかつぱ好かん。暗いし、急やし」

お茶を淹れながら母は笑った。

「恵良がこまかからばい。えらい大きくなれば楽に昇れるようになるちゃ」

恵良は不満そうに首を横に振る。

「違うよ。ばってんあん子も好かんち言うてたとよ」

「あん子？ 友達かい、あんたの」

恵良はクツキーをほお張りながら答えた。

「うん、二階ん部屋におる子。恵良ん部屋の隣の」

祖母は湯飲みを取り落とした。淹れたばかりの煎茶が床に零れ、炬燵布団を派手に濡らしたが、彼女はそのことに気づいてさえないように見えた。それは母も同様だった。

「恵良……恵良、二階の部屋んおる子って、顔ば……顔ば見たんか」

「……見やない。ばってん嘘じゃなか。顔ば見やないばってん、赤か服着た子が、あん部屋に……」

「言うてはいかん。そい以上言うな、恵良」

祖母の顔色は真っ青だった。いつもやさしく、怒鳴ることなど滅多にない彼女の鬼気迫る表情に恵良は戸惑い、知らず泣き出してし

まった。そんな孫を抱き寄せ、祖母は繰り返し含めるように言っ
て聞かせた。

「よかか、恵良、そんなことは忘れない。あん部屋には誰もおらん。

……よかね」

わけがわからないながらも恵良は肯いた。

どこにでもありそうな、ありふれた地方都市。大宰府市北部の町、
小糸町というのはまさにそんな集落だった。旧家らしい門構えを見
せる曾我家の門前でタクシーを降りた守門はつぶやいた。

「小糸町か。この町名も、思えば支石墓コイナドが由来なのかもしれない」
彼はインタフォンを鳴らし、応答を待った。じきに、恵良の母と思
しき強い博多訛りの女性が対応してくれた。二人は中へと招じ入れ
られた。応接間へ通されると挨拶もそこそこに守門は切り出した。
「単刀直入にお訊きします。こちらのお宅には、若くして亡くなら
れたという方がおられるんでしょうか」

恵良の父、修造は顔色を変えた。——当たりか、と守門はその胸
中でつぶやいた。

確証などはまるでなかった。だが、年若くして世を去ったからこ
そ、家族はその死を受け入れられなかったのではないか。「風土記
逸聞」に描かれる、長者の娘のように。

「……なしてそいば知つとうとです？ 娘がらなんかお聞きんなつ
たのですか」

「いえ。娘さん……恵良さんはなにも知らなかったようです。しか
し、先日の里帰りをきっかけに思い出してしまったのかもしれません。
お話いただけますか。恵良さんにはこちらのお宅にまつわる
なにかが取り憑いています。早急にそれを鎮めないと危険です」

恵良の母、蓉子が声を上げた。

「そげなはずはなか！ こん前、浄化は済んどるはずです。確かに

未良は呼ぶんはでけんかったばってん……」

守門は彼女を鋭く見据えた。

「未良？　それが、あなた方が支石墓を使って蘇らせようとした相手なのですか」

蓉子は口元を押さえた。修造は力なく肯いた。

「……未良は、二十年前に七歳で、恵良が生まれる前に死んだ、恵良ん姉たい。よう憶えとる、あん年ん夏は異様に暑くて、どげんかなりそうやった。わしと家内は未良ば連れて、筑後川ん花火大会ば出かけました。人出の多かこつで有名な花火大会やけん、未良が迷子にならんようにずち手ば握っちいた……」

終盤に差し掛かる頃、思いもよらないアクシデントが起きた。一尺玉が暴発し、空中から大きな塊の火の粉が大量に地上へ降り注いだ。見物客はパニックを起こして逃げ惑った。その騒ぎの中で、未良の手は修造から離れた。一瞬のことだった。だが修造には永遠に終わらない悪夢の始まりだった。

「そのまま未良は消えた。わしも家内も一晩中、必死で未良ば捜したばってん、なしても見つけれなかった。未良は誰かに攫われたとです。そんで警察の捜査ば始めて十日もした頃、犯人の拳がったとです。……二十歳そこそこの無職の男やった」

久留米市に住むその男のアパートからは未良が着ていた赤いワンピース、おそろいの赤い靴、それに切り取られた未良の髪が一束見つかった。だが死体は拳がらなかった。男は精神に異常を抱えており、罪を問うことさえできなかった。

「警察の言うには、死体は川にでも流したんやろうちゅうこつやった。——先生、こぎゃんこつ言われて納得しきる親のどこさおりますか？　身体さえ帰っち来んたい……身体さえ」

修造の声が震え、蓉子はすすり泣いた。阿夜はなにも言えずに守門を見上げた。彼はさほどの動揺も見せず、じつと恵良の両親を見つめている。修造は再び口を開いた。

「わしはあきらめられなかった。なしてももういっぺんあん子に会

いたかった。……やけん決心しました。『蘇魂』^{たまがえし}の秘儀を行うこ
つば」

それは旧家である曾我家に代々伝わっている禁じられた儀式だった。そもそも小糸町においては、支石墓はただの墓ではなかった。それは祭祀機構であると同時に、埋葬された人間をもう一度呼び出すための呪的な装置でもあった。守門は言った。

「巨石信仰にこの地独自の呪術的な性質が与えられた結果、こういう形になったということでしょうか。しかし……祭祀儀式を行うには条件が付きものです。それをすべて満たされたと？」

修造は肯いた。

「頭数ならすぐに集められました。わしと家内、そいに未良の祖母がいましたけん。石もなんでもかまわなかった、形さえ合っちいれば。——そいにこん曾我家の者であるちゅうこつ、そいがいちばん大事なことをやった」

守門の声が静かに響いた。

「もうひとつ、もっとも大事な条件があったのでは？ ……未良さんの亡骸は結局見つからなかったのでしょうか」

曾我夫妻の表情が沈鬱に歪んだ。守門は重ねて言った。

「亡骸がないまま、行ったのですね。正当な依坐^{よりまし}がなければ魂は呼応しない。儀式は、失敗したんですね」

「……あん子ん声だけでも聞ければ……そうすれば、せめて遺体ん場所の聞きだせる。そいだけでもかまわなかった。なのに……」

修造は顔を覆った。

「わしらが呼び戻したんは未良やなかった。ばってんなにかかはいまでもわからん。ありやそいから二十年間、こん家に留まり続けたとよ。やけんこん前『逆蘇魂』^{さかたまがえし}は行っち、そいを浄化したはずやった……そいなのに、そんために今度はそいが、よりによつて恵良に

……」

彼らが異界から呼び込んだなにかは、曾我家の二階、未良の部屋に居ついてしまった。修造はその部屋に鍵をかけ、恵良には納戸だ

と教え込んだ。開かずの間などと言って、好奇心を煽らないようにするためだ。

「なぜ今年になって、そのものを除霊しよう？　なにかきっかけがあったのですか」

答えたのは蓉子だった。

「夫は――癌なんです。余命は一年余りだつち言われました。自分が死ぬ前に決着ばつけておきたい、と。それで今年、あん子の……未良の命日に、もういっぺん儀式ば行うこつにしたとです」

誘拐されて殺された未良には明確な命日があるわけではない。彼らは未良がいなくなつた八月十三日を命日と定めた。修造が言つた。「あん墓は、こい……とうは、死んだ人間ば蘇らすためだけのもんやなかとです。蘇らせた者を元おつた場所ば還す役割も持つとる。……

そいをいままでせんかつたんは、認めたくなかつちからかもしれません。心のどつかで、それでもあの黒いもんがもしや未良かもしれんと……思いたかつちためかもしれせん」

奇しくも未良の命日は盆と重なつており、口伝に因ると現世うつしよと常世こよの扉が開くこの特別な期間は、術が成功する確率が高いとのことだった。頭数をそろえるため、入退院を繰り返している祖父を、盆にかこつけて一時帰宅させた。二十年前の「共犯者」である彼には異論はなかつた。阿夜は訊ねずにはいられなかつた。

「あの……恵良は、知ってるんですか。生まれる前に亡くなつてるお姉さんのことや、お父さんが……癌だつてこと」

夫妻はそろつて首を横に振つた。

「未良ん話はある子にしたこつはなかとです。矛盾しとるようすがね。そいにわしの病氣んこつも言うてはおりません。……あんたも、言わんでやつちください。知つたところでどうなるもんでもないですから」

守門は阿夜をちらりと見やつてから言つた。

「ともかく、いまは恵良さんに憑いているものを抜うのが先決です。正体がなんなのかはわかりませんが、召還されてしまったものが恵

良さんに共鳴して取り憑き、彼女を触媒にして自由に動こうとし始めている。放っておけば彼女自身も連れて行かれかねません」

修造の表情は暗かった。彼は重い口を開いた。

「やけん……『逆蘇魂』はこん前、いつぺん失敗しておるとです。

口伝どおりに行ったち言うのに。こい以上、なんばどげんしたらよかと……」

阿夜は不安そうに守門を見た。しかしそれは彼も同じことだ。恵良の奇行の理由はすべてわかったが、これからどうすればいいのか。考えを巡らせようとした時、玄関のチャイムが鳴った。

第四章 未良と恵良

赤いワンピースの女の子を恵良は追いかけていた。その子のこと
は小さい頃から知っていたはずなのに、長いこと忘れてしまってい
た。だから怒ってしまったのかもしれない。霧^{もや}でけぶることもわ
からぬ場所を歩き続ける。名前を呼びかけたいのに、それすら知ら
なかった。

ねえ、待って。行かないで、待ってったら。……お姉ちゃん。

恵良は手を伸ばした。先に行く女の子がゆっくりとこちらを振り
向く。

「——曾我！ 曾我、良かった、氣いついたんか」

瞭の声がした。目を開けた彼女のすぐそばに彼の顔があった。恵
良は驚いて起き上がった。

「な……さっちゃん？ なに、なんであんたがここに……それにあ
たし、いま、あの子を追って……」

突如、恵良の脳裏に閃光が差した。

——あれは姉だ。自分が生まれる前に死んだ姉だ。

いつも暗く急な階段を怖がっていた、赤いワンピースの女の子。
祖母にその存在を否定され、記憶から封じられてしまった姉。それ
で自分はずっと彼女のことを忘れたままにしていた。

「恵良。なにか思い出したの？ 君の家のことで」

瞭とは対照的に静かな声——それは黎だった。彼は部屋の端に片
ひざを立てて座っていた。

「黎君？ なんでここに……」

「心配だったからさ。いま、九州の君の家に、阿夜と、彼女の知り合いの大学の先生が向かつてる。君にかけられた呪縛を解くために」

恵良は眉を顰めた。「呪縛？ ……違うよ、そんなじゃない。

あたし……あたしも行かなくちゃ、家に。会わなくちゃ、お姉ちゃんに、ちゃんと」

瞭は驚き、彼女と黎を交互に見やりながら言った。

「なんば言つとるとね、曾我？ お前に姉貴なんおらんやろ。そいに呪縛つちなんのこつね、わかるごと説明しとつてくれ」

「彼女の実家に行けばわかると思うよ。いま説明しても信じてはくれないだろうし。……わかった、恵良、ぼくも一緒に行くよ。すぐに出かけよう」

黎は即座に立ち上がった。わけがわからないながらも、瞭がそれに続いた。

「恵良！ あんた、なして……」

玄関に現れた娘を見て蓉子は顔色を変えた。いま、彼女にこの家に近づいて欲しくはなかった。恵良に憑いているものが、彼女に再び悪影響を及ぼさないと限らない。修造は苦々しい顔でつぶやいた。

「佐々君、恵良のこつ、頼むつち言ったんに……」

恵良のすぐ横には、彼女を気遣うようにして瞭が立っている。彼は申し訳なさそうに頭を下げた。

「パパ、さっちゃんは関係ないでしょ。これはあたしの問題なの、あたしと——お姉ちゃんの」

蓉子は言葉を失った。真つ青になって恵良の肩をつかんだ。

「ばかいなこつば言うんでなか！ なしてあいの……あいの、未良んこつがあるよね。あいは……未良でなんでんなか、ただの化け物たい！」

その瞬間、家がぐらりと揺れた。雷鎚のようなラップ音が鳴り響き、真昼だというのに日蝕かと思まごう暗闇に辺りは包まれた。それは応接間も同様で、守門は咄嗟に阿夜を抱き寄せた。彼女は怯えて守門のシャツにしがみついた。

「お兄ちゃん……なにこれ、一体なにが起きてるの」

「わからないが……おそらくは二階の例の部屋に留まっ^{たま}ていて、蘇^{がえし}魂によつて曾我君に取り憑いたというなにかの仕業だろう。曾我君を連れて行く^{がえし}として^{たま}いるのか、この家全体を異界への穴に変えようとしているのか……」

守門は彼女を庇いながら部屋を出た。玄関に接する廊下の突き当たり^{がえし}に黎の姿を認め、驚きながらも駆け寄った。

「西行君！ 君も来たのか。すまないが、阿夜を頼む」

守門は阿夜から離れると、そのまま二階へ続く階段を駆け上った。といって、この異状を収める術に心当たりがあつたわけではまづたくなかつた。「お兄ちゃん！ だめ、戻って！」阿夜は必死で叫んでいた。その彼女を突き飛ばすようにして守門のあとを追う人物がいた。——恵良だ。

「恵良！ 行つたらいかん、戻らない、恵良！」

修造が叫んだ。しかし恵良は戻らなかつた。守門は踊り場に出、そのまま二階へと辿り着き、その部屋のドアを迷わず——施錠されているはずだつたが——開けた。生暖かい空気が押し寄せ、息が詰まるほどだつた。二十年もの間、誰も足を踏み入れなかつた部屋だ。暗闇の中で守門は懸命に目を凝らした。ベッドや机が置かれているのがぼんやりと見えた。次の瞬間、彼は恐ろしい力で喉元を締め上げられた。

「く……」

守門は必死に抗つたが、なにしろ相手の正体すらわからない。咄嗟に後退るもドアはすでに閉じられ、ノブも回らない。目が霞み、脚がぐらついた。その時、唐突にドアが破られた。

「恵良、恵良！ 戻らない……」

飛び込んできたのは恵良だ。階下から彼女を呼ぶ蓉子の声が聞こえた。恵良は闇に向かって叫んだ。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん、やめて！ お願い！」

守門をとらえていた力が弱まった。二人の前に、黒く濁った霧のようなものが漂っている。恵良はさらに部屋の中央へと進んだ。闇を払いのけ、徐々に浮かび上がるものがあつた。それは赤いワンピースの後ろ姿だった。

「お姉ちゃん……お姉ちゃんでしょ。ずっとここにいたんだね。ごめんね……あたし、すっかり忘れた」

恵良は前方へ手を伸ばした。ワンピースの少女がゆっくりと振り向いた。恵良によく似た、長い黒髪の女の子だ。恵良は微笑んだ。高校の時の自分を思い出したのだ。

「あたし、すっかり一緒におるから。……もう淋しくなかも、お姉ちゃん」

少女は恵良に向かって歩いてきた。恵良は彼女を受け止めた。守門の見守る前で、やがて少女は恵良の身体に融け込むように重なり、消えた。暗闇が急激に晴れ、同時に家鳴りも止んだ。

恵良は床に崩折れた。守門は彼女をそっと抱き上げ、室内を一瞥した。ひどくかび臭いことを除けば、かつて幼い女の子が使っていたことを容易に想像させる、ありきたりの六畳間だった。彼は静かに部屋を出た。

終章 ふたたび、カバレ・ガルシア

日付も変わる頃に訪れた「カバレ・ガルシア」^{キャバレー}は、客の波が引けたのか常になく閑散としていた。守門は薔薇^{シェージュ・ロゼ}の席に通され、着席するなり深々と息をついた。

「お疲れ、お兄ちゃん。はい、どうぞ」

すぐに淡い紫のドレスを着た阿夜が現れ、彼に冷えたグラスを渡し、スコッチエールを注いだ。守門はそれを一気に呷った。阿夜は彼の隣に腰掛けた。彼女も疲れているのか、守門に寄り添い、その左肩にそつと頭を乗せた。守門の鼓動が急激に速くなる。

「どうした？ 眠いのか、阿夜」

彼は平静を装いながら訊ねた。阿夜はゆっくりと口を開いた。

「恵良、九州に帰っちゃうのかな」

彼女が言わんとしていることを察し、守門は言った。

「ああ……あれから連絡は？」

彼女は首を横に振った。守門は阿夜の肩に腕を回し、やさしく囁いた。

「九州に帰るにしても、東京に戻るにしても、曾我君の納得のいくようにするのがいちばんさ。どっちにしたって彼女は君の友人であることに変わりはないんだから」

阿夜は微笑した。「……うん。そうだよね」

曾我家でのあの出来事から一週間が経とうとしている。恵良は未良の部屋で彼女と邂逅を果たしたあと意識を失っていたが、数時間後に目を覚ました。彼女は両親に、あの部屋にいたのはまぎれもなく姉の未良であることを話した。未良の髪だけを使って行われたという二十年前の「蘇魂」は、正確には失敗したわけではなかったのだ。彼女はずっと、あの家に——恵良の隣の部屋にいたのである。黒く邪悪な人外のモノに成り果てながらも。自分たちで呼び戻して

おきながら、末良の家族は誰もその存在を受け入れられなかった。ただ一人、妹の恵良を除いて。

「でも、どうして……恵良のお姉さん、あんな風になっちゃったんだろう。恵良に取り憑いたり、この前みたいに悪さをしようとしたり……どうして、生きてた時とあんなに変わっちゃったの」

帰りの飛行機の中で阿夜はぼつりとつぶやいた。守門は静かに答えた。

「死者っていうのは本来そういうものなんだ。同じ姿では戻っては来れない。オルフェウスもイザナギも、自分で望んだはずなのに、亡者である妻の姿を恐れた。それなのに死んだ人間を恋しがる。…勝手なものだけど、それが古今に伝えられる人間の真実なのかもしれない」

彼の言葉に黎は意味深な笑みを浮かべた。そして阿夜に向かってこう言っただった。

「恵良はきつと戻ってくるよ。淋しがらなくても大丈夫」

そのせりふを、いま阿夜は小声で反芻した。守門はふと思い出したことがあった。

「阿夜。この前も訊いたような気がするが、西行君は……彼にはなにかが見えるのか？　もしかして、そういう能力を持っているのか」
阿夜は守門の肩に預けた頭を僅かに揺らした。

「黎ってね……時々予感みたいなものを感じるんだって。親しい人に関することなら特に。あたしは『靈視』って言ってるの。元々、あたしと黎が初めて会った時も……」

「え？」

守門が訊き返そうとした時、衣擦れの音とともに近づいてくる人影があった。阿夜は顔を上げた。

「おつ、阿夜。なに今日ずいぶん閑みたいね、やっぱあたしがいないとだめって感じ？」

いつものように悪戯っぽく笑う恵良が立っていた。阿夜は勢いよく立ち上がると彼女を抱きしめた。

「ちょ、ちよつと阿夜、オーバーアクション過ぎない？ あたしその気ないんだけど」

「恵良、戻ってきたんだね。でも……良かったの？ それで」

阿夜は訊ねた。彼女の父の病氣のことを黙っている負い目もあった。しかし恵良は言った。

「大丈夫。定期的に帰ることにしたの。……パパはなにも言わなかったけど……やっぱり心配だから」

恵良は阿夜の腕をゆっくりと解いた。そして少し淋しそうに微笑んだ。

「恵良……」

それ以上なにも言えないでいる阿夜の胸の辺りを彼女は軽く小突いてみせた。

「こういう時言っせりふは決まってるでしょ？ ——ただいま、阿夜」

「……お帰り。恵良」

阿夜は笑顔で答え、もう一度彼女を抱きしめた。微笑を浮かべて二人を見つめていた守門は、ふと、先刻訊きそびれた阿夜の言葉を思い返し、胸の中だけで一人つぶやいた。

——彼は私が阿夜と再会することも知っていたんだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5799j/>

いざ風ぎ

2011年5月16日22時10分発行